

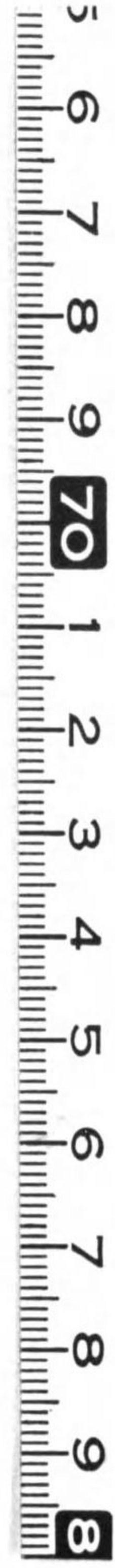
263.2

263. 2-338



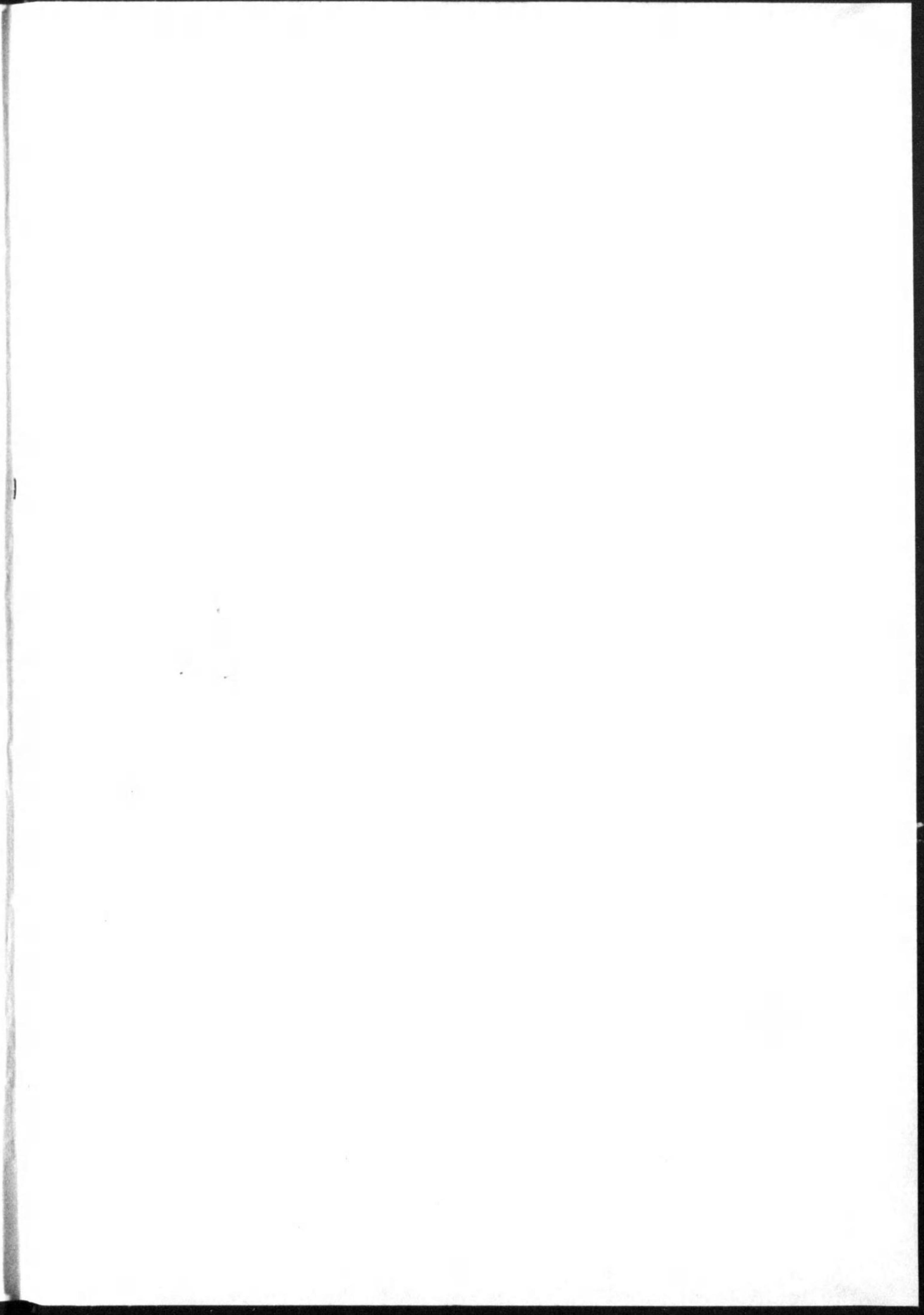
1200501352339

38



始





工5T-14

友納友次郎著

讀方教育原論

東京 明治圖書株式會社



自序

憲二、それは私の忘れることの出来ない愛兒の名であつた。二十一歳、高等學校三年、彼の將來は私にとつて多大の希望と信頼の標的でなければならなかつた。それが一朝病魔の手に奪ひ去られてからといふものは、私の心境は全然一變せざるを得なかつた。爾來人と對談するのにも物憂く、門の戸固く鎖して、亡兒の位牌を前に、ありし日の思出に泣くのをせめてもの心遣こころづかいとした。

たゞこの際、私を慰めてくれたものは日頃の讀書癖であつた。爲すこともなく空虚な生活を續ける間に、讀んでは書き

書いては読みしてゐたのが、いつの間にか積り積つて篋裡にうづだかくなつた。今や亡兒の三回忌も過ぎて、これをしも彼が悲しき思出の形見にもと、ふと思附くにまかせて、その中の目ぼしきものを抜き取つて、かくは梓に上せることにした。もと／＼かゝる心ばせになつた本書のことゝて、章節の分ちも定からざる上、心覺に書留めた諸大家の所説をそのまゝ引用したところも少くはない。この點高説引用の諸先生に深厚の謝意を表すると共に、大方の御承認を仰ぎおく次第である。

本書はかゝる動機と念願に成つたもので、一見隨筆雜纂の觀がないでもないが、大體これを前・中・後の三篇に分ち、小さい見出をこれに配することにした。

前篇は本質論で、史的回顧に出發して現象學的考察に入り、讀みの本體を究明し更にセンテンス・メソッドの根柢を極めると共に、現象學的學習過程を組織立て、大方の批判を仰いだ。本篇の學的根據としては、垣内教授を始め、西田・金子兩博士その他諸先生の御高説に仰ぐところが多い。

中篇は方法論ともいふべきで、センテンス・メソッドの精神に基き、先づ文意の正體を闡明し、次いで節意・句意・語意の考察に入り、以て本書の中心題目である形象直觀の本義を明かにせんことを念とした。しかしてその文意の直觀は學習過程における第一次直觀に、文意の自證は分析に、形象の直觀は第二次直觀に該當するのはいふまでもない。本篇における現象學的根據は、主として山内得立博士及び佐藤慶二先生の御

高説に仰いだ。

後篇は鑑賞論で、前半において鑑賞の本質機能を究明し、後半にはその具體例として、讀本の各卷から詩韻文の重立つたもの一つづつを擇抜いて、これが指導の實際案を擧げることにした。本篇における感情移入説は阿部次郎・高橋里美兩先生に、モーリッツ・ガイガ―の現象學的方法は高橋禎二先生の譯に據つたことを明記して、諸先生に厚く御禮を申上げる次第である。なほ本書を成すにつき、舊知久保田宵二氏及び戸塚第三小學の諸君の援助を得たことを深く感謝する。

時恰も春陽、家にかぶさつた櫻は今將に蕾を破らんとしてある。憲二が死んだのもやはり春で、ちやうど今年のやうに

花が取分多かつた。私が寢床のまゝ、縁側に抱へ出して、眞盛の花を見せると、彼は寂しい眼で私の顔を眺めて、にこりと笑つたのが今も見るとやうである。花はやがて咲いて散るであらう。私はこの著を亡兒の形見として永久に記念するのをせめてもの慰とする外はない。

昭和七年四月高田馬場の草廬において

友納 友次郎 識

(東京市外上戸塚九六一)

讀方教育原論

目次

前篇 序 論

第一 轉 向

第二 何のために

一昔前の教育……(四)——何のために……(五)——本質究明……(六)

第三 讀みの本體

自己を讀む……(八)——思想的破綻……(九)——その後の波紋……(一九)——生命の生長

鎌倉の無學禪師、大唐の亂に捕へられて切らるゝ時に、電光影裏斬_二春風_一といふ偈を作りたれば、太刀をば捨てゝ走りたると也。無學の心は太刀をひらりと振上げたるは、稻光の如く、電光のピカリとする間、何の心も何の念も無いぞ。打つ刀も心はなし切る人も心はなし、切らるゝ我も心はなし、切る人も空、太刀も空、打たるゝ我も空なし、切らるゝ人も人にあらず、打つ太刀も太刀にあらず、打たるゝ我も稻光のピカリとする内に、春の空を吹く風を切る如くなり。一切止まらぬ心なり。風を切たのは太刀に覺もあるまいぞ、かやうに心を忘れ切て、萬の事をするが上手の位なり。舞を舞へば、手に扇を取り足踏む、その手足を能くせむ、舞を能く舞はむと思ひて、忘れきらねば、上手とは申されず候。未だ手足に心止まらば、業は面白かるまじ。悉皆心を捨きらずしてする所作は皆惡敷候。

——澤庵禪師『不動智神妙錄』——

…(四)——生命といふこと…(七)——表現とは何ぞ…(三)——文の客観性…(三六)
——表現を読む…(四)——形象といふこと…(四五)——現象學的考察…(五七)——讀
みの本體…(六五)

第四

センテンス・メソッド……………六

アルファテック・メソッド…(六九)——フォネテック・メソッド…(六九)——ワード・
メソッド…(七〇)——センテンス・メソッド…(七〇)——歴史的回顧…(七四)——セン
テンス・メソッドの提唱…(七〇)——エルチエ式の缺點…(八〇)——センテンス・メ
ソッドの精神…(八三)——體認の作用…(八五)——現象學的根據…(八八)——現象學
的學習過程…(九二)——第一次直觀…(九二)——分析…(九二)——第二次直觀…(九四)

第五

プロブレム・メソッド……………一〇七

科學的なるもの…(一〇七)——科學的文…(一一〇)——了解の方法…(一一三)——プロブ
レム・メソッド…(一一八)——プロブレム・メソッドの適用…(一二九)

中篇 形象直觀と讀みの諸相

第一 文意の直觀……………一三七

文意といふこと…(一三七)——文意の性質…(一三三)——文意の生長…(一三六)——文意
の統一性…(一四〇)——文意の種類…(一四四)——文意の表明…(一七七)——各卷におけ
る文意の表明…(一八二)——卷二…(一八二)——卷三…(一八二)——卷四…(一八二)——卷五…
(一八五)——卷六…(一八六)——卷七…(一八六)——卷八…(一九〇)——卷九…(一九二)——卷十…
(一九四)——卷十一…(一九六)——卷十二…(一九八)——文意のとりかた…(二〇七)——實例そ
の一きやうだい…(二二三)——その二、ブックローフ…(二三五)——その三、八幡太郎…(二四〇)
——その四、賀茂川…(二四三)——その五、一太郎やあい…(二五七)——その六、塙保巳一
…(二五九)——その七、動物ノ色ト形…(二六三)——その八、太陽…(二六九)——文意のとり
せかた…(二七三)——實例その一、五いちいさん…(二七三)——その二、鯉のぼり…(二七五)
——その三、木下藤吉郎…(二七六)——その四、餅つき…(二八四)——その五、弟から兄へ
…(二八七)——その六、畫師の苦心…(二八七)——その七、蜜柑山…(二八四)

第二 文意の自證……………二九一

分析といふこと…(二九二)——現象學的分析…(二九二)——ノエマとノエシス…(二九四)
——分析のこゝろ…(三〇四)——内省と自證…(三〇七)——節意の意義…(三四)——節意
の性質…(三三)——節意の表明…(三六)——各卷における節意の表明…(三八)——
卷二…(三六)——卷三…(三三)——卷四…(三六)——卷五…(三四)——卷六…(三四)——卷
七…(四八)——卷八…(三五)——卷九…(三六)——卷十…(三六)——卷十一…(三六)——卷
十二…(三七)——節意と句意…(三七)——句意と語意…(三〇)——語と語意…(三八)
——學習指導形態…(三五)——その一、汽車の旅…(三五)——その二、きのこ取…(四六)
——その三、餅つき…(四五)——その四、銀行…(四四)

第三 形象の直觀……………四三〇

想の形成…(四三〇)——プロット…(四三二)——想の形…(四三三)——形象の概念…(四三七)——
形象の構造…(四三六)——形象の直觀…(四三六)——例一、陶工柿右衛門…(四三五)——例
二、青の洞門…(四七一)

後篇 鑑賞の本質と機能

第一 鑑賞と讀みの作用……………四八一

鑑賞といふこと、その一…(四八一)——鑑賞といふこと、その二…(四八三)——藝術的な
るもの…(四八六)——感情の移入…(四九〇)——現象學的考察…(五〇四)——美學におけ
る現象學的方法…(五〇〇)——鑑賞の心境…(五〇五)——鑑賞の對象…(五〇六)——鑑賞
の作用…(五〇二)

第二 詩・韻文の指導形態……………五〇四

その一、ホシ…(五〇七)——その二、ヒカウキ…(五〇五)——その三、うちの子ねこ…(五〇七)
その四、麥まき…(五〇九)——その五、私のうち…(五〇四)——その六、なぎ…(五〇九)——そ
の七、初夏の夜…(五〇六)——その七、町の辻…(五〇〇)——その九、今日…(五〇〇)——その
十、霧…(五〇〇)——その十一、孔明…(五〇〇)——その十二、鳴門…(五〇七)

——(目次終)——



讀方教育原論

友納友次郎著

前篇 緒論

第一轉向

—序に代へて—

—

長い間の讀書生活にもあきて、私は今若人の群に伍して、國語教育の實際を語らうとする。それはほんの偶然のことではあつたが、私にとつては可なり大きな生活の轉回といはなければならぬ。

既往三十年、國語教育と終始した私は、ふとしたことからにはかに筆を收め口を緘して靜かに讀書三昧に日を送つた。人を訪問するでもなく、人の訪問を受けるでもなく、僧庵に等しき草廬にひとりつくねんと書をひもどく、それは決して世をさけたのでもなければ、人をのろつたのでもない。たゞ當時の生活のあきたらなさと、内心のもだへをどうすることも出来なかつたためである。求めんとして得がたき或幻影を追ふて、ひたばしりに走つてゐた私が、力つき根つきてたうとう草野に倒れ伏し、なほも前途に立ちのぼる陽炎のすがたを見つめながらもだへてゐるそれにも譬へよう。何といふみじめなことだつたらう。

それからほとんど八九年、鳴かず飛ばすの隱者の生活を續けながら、思索と體驗に日を送つてはゐたが、生きた實際に遠ざかつた私は、木から落ちた猿にも似て、徒に觀念の遊戯を繰返すに過ぎなかつた。

二

街頭に出て驚いたことは、その進歩の著しいことと、その惱みの甚だしいことで

ある。實際今日の學校は進歩してゐる。しかも今日の實際家はみんな惱んでゐる。何だか矛盾したいひ方のやうだが、兩者は因果の關係にあつて、惱んでゐるから進歩したともいへるし、進歩したから惱んでゐるともいへよう。

外のことは知らないが、少くとも我が國語教育ではさういへる。素讀講義・輪講の訓詁式の教育から内容形式の對立時代に入り、轉一轉して遂に今日の本質的研究の時代を迎へた。現在の一點に立つて、過去を顧み將來を思ふとき、一層その感を深くする。

三

私は今大童になつて、若人の群に伍してゐる。さうして生きた實際に直面してゐる。過去の私のひからびた生活が、突如かうした新しい意義を帯びて、力強く現在の私を動かし始めたことを意識すると、何か知ら勇躍と歡喜に拊舞したいやうな氣がしてならない。

第二 何のために

一

一昔前の教育 一昔前の教育は研究者が思ひ思ひに築いた思想の殿堂に立てこもつて、おのれの畫がいた偶像の前に隨喜讚仰の限りを盡したものである。當時の風潮も亦それを許して、それ〴〵好むにまかせて甲に従ひ乙に走つて、新奇を競ふをこれことゝした。

いつの世、如何なる運動でも、實際を離れた觀念の遊戲は容易でもあり又面白くもある。具體的、客觀的な問題に引かゝらなかつたら、頭の中で理想も描ければ、理窟もこねられる。幻影を追ふて遊戲してゐるのは面白いことには違ひないが、實際の問題はさうは行かない。殊に生きた事實を前にし、生きた子供に直面しては、そんな實行性の乏しい觀念的遊戲でいつまでも満足されよう筈がない。

人々は目覺めた………一つき又一つき………曉の鐘が鳴る………そこには生の

リズムが高く脈打つてゐる………過去の重荷で押し潰されようとしてゐた人々までが甦つた。さうして、びとしく眞に生き眞に成長するものゝ姿を見つめた。

二

何のために 無目的でおし通してゐた時代ならばともかく、『なぜ』だとか、『何のために』だとか、『何の故に』だとか………そんなことを考へる今日では何事にも理由や目的がはつきりしなければ満足することが出来ない。我が國語教育界もそれで、何のために讀ませるか、讀ませてどうなるか、讀むとはどんなことか………さうした根本的な問題が解決されなければ、一步も踏出すことが出来ない。いな踏出せないと考へるところに現代人の特色がある。

實際今日の學校は、簡単な語句なり文章なりを讀ませるにしても、その目的を考へ、作用を考へ、更に進んでは、その本質を究明し、價値を考覈しなければ満足しない。ハナ、ハト、マメ、マス、を授けるにしても、ヘチマ、ノ、ハナ、ガ、サキマシタ、ツボミ、モ、タクサン、ツイテキマス。を讀ませるにしても、徒に從來の

傳統を墨守することをしないで、それ相當の根據があり、學的背景が無ければ容易に手を下せないものと信じてゐる。語とは如何、文とは如何、更にその本質は如何に、作用は如何に……と究明し盡さなければ止まないところに現代人の現代人たるところがある。

三

本質究明 現在の學校の門をくゞり、現在の實際家に接したとき、痛切に感じるのは潑刺として躍動する生氣であつて、一昔前の學校に見るやうな沈滞した濁つた空氣ではない。疑問は疑問、煩悶は煩悶として卒直にいつてのける。齒に衣着せるやうな煮切らない態度は微塵も見えない。それが又たまらなく嬉しい。

私が某校を訪ふた際の問題は、讀みの本體についての究明であつた。

曰く、自己を讀むこと、

曰く、表現を讀むこと、

曰く、形象を讀むこと、

それ等が論争の中心であつて、『自己』『生命』『本質』『表現』『形象』の意義乃至その學的根據の如何が議論の焦點となつてゐた。

凡そ書を讀むは必ず自分の才智慢心を忘れ、心のひづみなく氣を平かにし、己が邪智了解は箱にをさめて出さず、讀書面を一段くり返し、深く味ひ、その書中教への本意をとくとのみこみ、心の底に止め、聖教は人の道を知りて人と成るの正法といふ事を第一に通明すべし。何ほど書をよみても草々の看をなし、早合點する人には何ほどの金言名句を教へ示すとも、諺にいふ夢に餓頭食ひたる如く、身に切ならず、何の益なし。

(新井白蟻)

第三 読みの本體

一

自己を讀む 標語そのものが頗る暗示性に富んではゐるものゝ著しく唯心的獨我的思想に囚はれてゐる。始唱者の考では、文章をたゞ他人のものとして理解しただけでは物足りない。その理解を通して自己を見出すでなければ本當に讀んだものとはいへない。………砕いていふと、自己のもつてゐる力だけしか讀めないのであるから、他人の書いた文を讀むのであるが、結局自己の力を示し自己の心の姿を自己に見せることになる………といふのであらうと思ふが、根本的の説明を缺いてゐるために、容易にその真意を捕捉することが出來ない。殊に結論としてあげた『人は自己以上を解するものにあらず、また自己以上を語り得るものにあらず』といふ主張の如き、學的根據を明かにしない限りは、主觀に偏し人間の發展性を無視したものといはれても致方はあるまい。

とはいへこの立言は我が國語教育界に異常な衝動を與へ、やがて勃興した生命主義の哲學觀と結びついて、生命の讀方、生命成長の讀方、創造の讀方等々の主張を生み、進展して今日の盛觀を呈するに至つた。

すべて前人未踏の原野を拓くは容易のことではない。しかのみならず、すでに或程度の定見定説によつて動いてゐた我が國語教育界に一石を投じ、一大波紋を描かしたこの立言が、學者でもない一實際家によつて叫ばれたことは、眞に驚嘆に値すべきことといはなければならぬ。

思想的破綻 他を讀む——俗ないひ方ではあるが——をのみことゝしてゐた實際界は、突如として『自己を讀む』の主張に驚かされて、混迷の淵に陥らざるを得なかつた。それは眞に空谷の梵音であつた。前代の傳統にあき、多年の積弊にうみつかれてゐた人々は、一齊に歡呼の聲をあげ、あらそつてこの一新旗のもとに走つた。

讀み方は自己を讀むものである。綴り方は自己を書くものである。聽き方は

自己を聴くものであり、話し方は自己を語るものである。……この主張はあたかも一個の鐵案でもあるかの如く、一時我が國語教育界を風靡した。……人は自己以上を解するものにあらず、また自己以上を語り得るものにあらず、……自己をはなれて讀なく、自己を中心としない教育は無意味である……これは當時の通り言葉であつて、殆んど信仰的にかく信じ、かく行ふを通則とするかの觀があつた。むろん當時の時代思想が背景となつて、人々をかく信じ、かく行はしめたことはいふまでもないが、その根柢をなす思想が著しく功利的見地に墮してゐたのは、何人も否定し難いところであらう。

——讀み方は自己を讀むものだといふ余の主張に對して、讀者の中には必ず『文章を讀んで、自己を讀むものでない。』と駁するものがあらう。余は論者が切に文章を讀む場合の有様を内省せん事を望む。文章はすべて作者が傳へんとする思想感情を洗煉して書き現はしたものである。されど紙面には文字がたゞ順序よくならべてあるだけで、内容は一物も現はれてゐない。その

文字をたどつて、吾人が内容を會得するのは、そも／＼いかなる手續を経るか。即ち文字の現はす語句に相當する自己の觀念を思ひうかべ、それを文字の示す文の形式に連ねて、『作者の思想感情はかくあるべし。』と想定するのである。余は想定するといふ。果して作者の思想感情と一致するか否かは疑問である。勿論文の形式には一定の法則があつて、かゝる形式はかゝる意義を現はすものと定まつてゐるし、語句にもそれ／＼の意義が定まつてゐるが、聯想は人々同一でない。故にある文章に對して讀者が百人居れば、解釋は百色いはれぬ。こゝが極めて面白い所で、一人の學說が二三の學派にわかれ、古聖賢のことばに數種の解釋が生ずる譯である。世には他人の文章を讀んで、誰の說はかうである、誰の意見はかく／＼である、とさながら作者でもあるかのやうに説くものがある。余は之を聞く毎に、常に『そんな學習態度では到底自己の向上發展は望まれない。』とかたはらいたく思ふ。吾人が他人の文章によつて、その思想感情を會得し、之を他人に傳ふる場合には、『誰がかく／＼

いつてゐるのを余はかく解した。』といはねばならぬ。然らずんば少くとも
読み方の意義には叶はぬ事となる。——蘆田恵之助氏著『読み方教授』

この主張の如き、今日においても全然首肯し難いものではないが、本来不可分の
言語(文字)と意味内容とを二元的に對立したものと考へたところに思想的破綻
を來したのは已むを得ない。殊に後半の……讀むことは畢竟想定すること
ある……といふ主張の如きは、その後におけるいはゆる想定説の淵源をなすも
ので、現在においても一顧の値なきものとして排し去るべきものではない。
私もかつてこの問題に對して、

——一體形式といふ言葉を、言語や文字文章を指してゐるものと考へてゐ
るのは間違つた考へです。内容に對して形式といふ言葉はそんな安っぽい
ものではありませんまい。形式といふのは主觀がその對象となつてゐる。言語
や文字文章に對して働く、その働きを意味してゐるのであります。主觀は對
象を統一する働きであります。この主觀が對象となつてゐる言語や文字文

章に働くと、その對象となつてゐる言語や文字文章が有つてゐる内容に應じ
て、そこに新しい世界が開けます。この開けた世界を客觀といひ、そこに描き
出された世界を客觀の世界と申します。この客觀の世界は人々によつて非
常に異つてゐるのでありまして、甲の人が描き出した客觀界と、乙の人が構成
した客觀界とは全然異つた世界が出來てゐます。そこに讀むことの意義が
あり、そこに主觀の尊さがあります。教材の性質が異なるにしたがつて、主觀が
描き出した世界は區々で、或は知識の世界となり、或は道德の世界となつて現
はれます。この描き出された世界が即ち内容であり、對象に働く主觀の働き
が形式であります。つまり主觀が對象を統一する働きを形式と名づけ、その
働きによつて構成された世界を内容と稱します。かやうに解釋しますと、單
純に言語や文字文章を形式といひ、その形式が現はしてゐる事實を内容とい
つてゐるのが何だか物足らなくなつて來ます。言語や文字文章は一つの符
號に過ぎません。だから、その符號に對しては、どうしても讀む人の主觀が働
かなければ意義をなしません。符號は符號の儘では何等そこに意義をなさ



ない。符號に働く主觀の力が無ければ、それを統一して内容の世界を構成することが出来ません。だからこの間に一番尊いものは讀者の主觀そのもので、讀者の主觀の働きがなかつたら何等の意義をなしません。ちやうど私達が外國語に接したやうなものであります。話を聞いてもたゞ響だけで、何の事だか解りません。本を見てもたゞ符號を見るだけで、そこに何が書いてあるか全く解りません。その響を聴き分け、その符號を見分ける力は、聞くその人、讀むその人の形式の力であります。この力がいはゆる讀む力であつて、この讀む力がなければ、その對象となつてゐる文の意義が成立ちません。

かやうに論じ詰めて來ますと、そこにおのづから讀むといふ作業もはつきりして來ませうし、讀むといふ意義も明かになつてまゐりませう。つまり讀むといふことは、この符號ともいふべき言語や文字、文章に主觀が働いて、そこに構成された思想とそれを表現する働きとを意味してゐます。内容を構成する働きとそれを表現する働き、これが一緒になつて働きます。だから、その働きが違へば表現される内容の世界も異つて來ます。同じ對象に對しても

それに働きかける人が違へば、そこに描き出された思想内容も相違します。つまり十人十色、百人百様といふのが本當であります。とにかくこの二つの働きが合致して讀むといふ働きが成立つといふことは確かな事實だと思ひます。——小著『私の讀本教育』

と、別個の見地から卑見を述べたことがあるが、——今から考へると杜撰極まるものではあつたが——これとて破壊に急にして建設にいとまなかつた當時の事情の然らしめたところとはいへ、文化財としての言語文章の客觀的存在を無視してゐた譏は甘受しなければならぬ。むろん主觀我と共に客觀我の存在を忘れてゐたわけではなかつたが、主觀をもつて讀むといふ意を強調することにのみ汲々として、それが客觀我を包攝してゐることを閑却してゐたのは、何としても手落であつた。

西田博士の『働くものから見るものへ』に——

……私が人と語る時、言語によつて私の考は直に他の人に通じ、他人の考は亦

直に私に通ずる、獨我論者にあらざるよりは斯く信ぜざるを得ない。如何にしてかゝる思想の交換が可能であらうか。言語とは物理的には空氣の振動と考へられ、心理的には聽覺的現象に過ぎない。かゝる言語が我々の思想を運び様はない。我々の精神の中に本質的に共同的なるものがあつて、言語といふ符號によつて互に相認めると考へざるを得ない。表現共者は非人格的にして兩者に共通なるが故に、之を媒介として二つの精神が相知ると考へられるのである。かく考へれば表現とは我々の思惟に偶然的なる無意義の符號とも考へられるのであるが、ブラトールが思惟とは心と心とが言葉なき會話であると云つた如く、我々は何等かの意味に於ての言表なくして思惟することができらうか。私の前の心と次の心と相理解し合ふには、何等かの意味に於て言表がなければならぬ、心と心の私語がなければならぬ。我々の思惟は言表によつて客觀化せられ、客觀化せられることによつて思惟が成り立つのである。我々が全く言語の表象によらないと思ふ場合でも何等かの表象が言語の代理して居るのである。赤の概念を考へる時、赤の表象を思ひ浮べるとしても赤の表象と赤の概念とは同一ではない。思想が思

想となるには一度公の場所に持ち出されなければならぬ、他人との共同の場所ではなくとも少くも自分自身の心の公の場所に持ち出されなければならぬ。之が言表である、言表は思惟の結果ではなく寧ろその成立條件とも云ひ得るであらう。我々の思惟は言表によつて可能性を得、言表によつてその主觀性を脱却して客觀的となるのである。我々の思惟の根柢には言表の世界がある。かゝる意味に於て、ボルツァーノなどが所謂命題自體の如きものより論理學を始むべきであるといふのは故あることであらう。思惟の作用とはかゝる内容の發展に過ぎない。純なる思想は言語に言ひ表された命題自體の如きものでなければならぬ、我々の思惟は此に始まつて此に終るのである。フィードレルは言語は思惟の外的符號ではなく思想の發展の終點であると云ふが、單にその終點であるのみならず、その出立點でもなければならぬ。純なる思想は我々の思惟作用の中に含まれて居るのではなく、寧ろ言語の世界に宿つて居るのである、言語は思想の身體の如きものである。無論精神のない身體は單なる物質に過ぎぬ様に、意味を宿さない言語は單なる音聲に過ぎぬであらう。併し我々の生命は肉體の生成によつて始まり、その

結果は亦物の世界に保持せられるのである。ヘーゲルの云ふ如き客觀的精神は客觀的存在の背後にあるものでなければならぬ、客觀的精神の統一は寧ろ外にあるのである。プロチンが云ふ如く、大理石に刻まれた美しき形は大理石の内にあつたのではない、以前からあつたものである。或はそれは藝術家の頭の中にあつたと云ふでもあらう。併し藝術家が單に眼と手を有するが故に之を有するのではない彼は藝術の理念を分取するが故に之を有するのである。藝術其者の中には遙に高き美がある、それは大理石の中には入らない、自己自身の中に止まりながら、自己より劣れる形を生ずるのである。すべて精神的なるものは自己の中に自己を寫すと云ひ得る如く、客觀的精神は言語によつて自己の中に自己を映すと考へ得るでもあらう。我々の心と心とが互に理會するのは、何時でもかゝる客觀的精神の立場に於て可能となるのである。我々は言語によつて客觀的精神の中に生きることによつて、互に理會するのである。我々が自己の主觀を没して客觀の中に生きるには客觀的表現によらねばならぬ、即ち言表によつて我々は客觀的思想の立場に立つのである。明瞭に考へられた思想は明瞭なる言表を有たねばな

らぬ明瞭に言ひ表すことのできない思想は尙明瞭に考へられてない思想である。我々が物の概念を作るにも言語によらねばならぬ、赤の表象から赤の概念を作るにも言語の力によるのである。命名作用によつて、我々は表象作用を超越して意味の世界に入るのである。思惟と感覺との結合の如きも言表作用によると云ひ得るであらう。感覺が思惟の内容となるには先づ言表作用によつて意味化せられねばならぬ。赤が赤であると自己自身を言表した時、經驗界の市民権を得るのである。……とある。熟讀玩味することによつて教へられるところが多々あると共に、學的素養なき私達の主張の思想的破綻が那邊にあるかを發見するであらう。

二

その後の波紋 自己を読むの主張はその後幾多の波紋を描いた。自己とは何か……自己が何を讀むのか……讀む自己は……讀まれる自己は……かうして實際家の多くは、自己の究明に可なりの時間を費した。——それは殆んど觀念の遊戯に過ぎなかつたが——この間論争の的となつたのは、いふまでもなく讀む自己

と讀まれる自己の實體如何であつた。當體の自己と客體の自己、それが果して同一であるかどうかの問題であつた。始唱者の頭には當始それだけ深い考へがあつたことではなかつたであらうが、もしも讀む自己と讀まれる自己とが同一であるとする、その間進歩もなければ發展もない。すると讀むそのことが何の意味もないことになる。何のために讀むのだから、意味がさつぱりわからなくなる。

事實讀む前の自己と讀終つてからの自己とは同一とはいへない。そこには自己の成長があり、生命の伸展がある。しかし、これがつきりした言葉でいひあらはされるやうになつたのは、ずつと後の、ベルグソンなどの哲學に教へられてからのことであつた。

ベルグソンはいふ、

……過去はかく現在の中に保存されてゐるといふ事實から、吾人の意識は決して同一状態を繰返すものでないことが知れる。縱令周圍の事狀は同一であつても、人格そのものは絶えず新しい歴史の上に立つてゐるため、それら周圍の事狀がいつも同一不變の人格の上に働くといふわけに行かない。人格は次第に蓄積

し來れる經驗によつて、刹那毎に新しく造られて行くため、不斷に變化して已む時がない。不斷に變化するが故に、如何なる心的状態と雖も皮相的には似寄つて見えようが、決して實質的に同一状態を反復し得るものではない。『連續』は決して舊の状態へ逆行しないと云ふ理由はこゝにある。吾人は、一瞬間たりとも、同一生活を繰返すわけに行かない。蓋し然かする爲めには、その後に取り來つた凡ての記憶を消してしまはなければならぬ。かくの如きことは、よし理知的には出來得るにしても、意志的には、到底實行すべからざる事柄である。

人格は不斷に發生し、生長し、成熟する。その各瞬間は、前の瞬間に何ものかの加はつた新しい状態である。一步進めていへば、それは單に新しいばかりでなく、實に預め測るべからざる現象である。もちろん現在の状態は、一瞬間前に我の中に有りしもの及び我に働きかけつゝありしものに因つて説明せらるべきであらう。現在を分解すれば、所詮これらの要素の外何等他のものが含まれてゐないであらう。けれどもこれら純抽象的要素の外に、かゝる抽象的要素に具體的組織を與へて、こゝに醇一不可分なる形態を創造する所以のものが存することを忘れてはな

らぬ。この酔一不可分なる形態こそは、人間以上の叡智を以てしても、なほ預め測知すべからざるものではないか。凡そ事物を豫知するといふことは、既に過去において知覺したものを、新に未來に移して見ることである。既知の要素が將來新たな秩序のもとに新たに配置されるさまを想像することである。然るに前に會て知覺されしこともなく、而も酔一無双であるが如き形態は如何にして豫知されることが出來ようか。吾人の心的状態の一つ／＼は、それが次第に開展蓄積して行く歴史の一瞬時である限り、まさに斯くの如き不可測のものではないか。それは酔一である、既知のものではない。心的状態の一つ／＼には、その不可分性の中に、一切の既知のものと並に現在新たに加はりつゝある一切のものが包含されてゐる。かゝる一心的状態は、まさに獨特無比な歴史中の獨特無比な瞬間ではないか。

完成した肖像畫は、モデルの姿と畫家の性質と繪具の本質とによつて説明される。けれども、如何にそれらの要素が明白であつても、何人と雖も恐らくは畫家自らさへも、豫め如何なる肖像畫が出來上るかを精確に知ることは出來まい。かゝることを先見するは畢竟その畫が製作されざる前に、既に製作されてゐるといふ

意味になる。こは明かに自滅を招くやうな不都合な假定ではないか。吾人が生命の毎瞬間についても、まさに同じ事がいへる。吾人は實にこの各瞬間の畫工に外ならない。毎瞬間は、それ／＼一種の創造である。恰も畫家の技倆が作物そのものゝ感化によつて、或は練り上げられ或は毀損されるなど、兎に角何等か影響を蒙ると同じく、心的状態の一つ／＼は、その發生するや、必ず吾人の人格に何等かの變化を與へなければ已まない。我等の人格は、これがために新しく成つて行くのである。故に彼の『行爲はその性格の如何に基づく』といふことも眞理であらうが、吾人は之に加へて、性格は或程度まで行爲の如何によつて變化するもの、随つて吾人は絶えず自己を創造して行くものといはなければならぬ。而してこの自我によつて自我を創造するといふことは、行爲そのものに明瞭な理性が伴へば伴ふほど完全になつてくる。蓋しこの場合に於ては、理性の働きかたは、彼の幾何學の場合に於けるとは甚しく面目を異にしてくる。幾何學の場合に於ては、始めから人格に無關係な——即ち變化しない——一定の前提が與へられ、且つ同じく人格に無關係な結論が必然的に引出される。然るに行爲の場合に於ては、人を異にし、

若くは同一の人にも場合を異にすれば、理性はそれ〴〵甚だしく異つた、しかもそれ〴〵合理的な行爲を吾人に教へる。畢竟人が異なり、場合が異なれば、理性の働き方はそれ〴〵異なつて、決して同一不変でないからである。さればこそ、かゝる複雑な理性の働きかたは、到底幾何學の場合の如く、單に外部から抽象的に取扱ふこと難く、また他人に代つてその人の生活上の問題を解決することも出来ない。吾人はめい〴〵、自分の問題を自力で内から解決しなければならぬ。たゞしこの點に就ては、こゝに深く立入る要がない。吾人はたゞ『存在』といふ語の精確な意味を吾人の意識状態を検べることによつて、知り得ればよい。而して吾人の觀察によれば、すべて『存在』といふことは、意識的生類に取つては『變化』である。變化は成長を意味し、成長は不斷の自我の創造を意味する。……と。

生命の成長　読み方乃至綴り方が、生命の一語をさぐりあてゝからは、まるで面目一新の感がある。

曰く、讀むとは自己が自己を讀むことである。生命の成長である。

曰く、讀むとは他人の文を機縁として、自己生命が自由にまで進展することである。

曰く、文を讀むことにより、文の中に自己の姿——生命を發見し、新しき自己を創造する。更新された自己——生命ある自己建設が營まれる。

曰く、文を讀むとは自己を讀むことである。作者の内的生命を機縁として、自己の内部にある力や生命を目ざまし、躍動させ、成長させることである。

等々、々々。

生命の一語、それは研究者の多くが、求めつゝ、しかもいひ得なかつた一語であつた。自己が自己を讀むといつても、ぼんやりしてゐるし、第一の自己が第二の自己をといつても、びたりと來ない。渾沌とした蒼海の中に探りあてた葦芽あしかぶのそれにも似て、何か知ら、うすばんやりした或ものを意識してはゐるが、はつきりとそれを言ひ表はし得ないで惱んでゐた。その際、この全一的な、弾力性に富んだ言葉を得て、隨喜渴仰の限りを極めたのは無理からぬことである。

もちろん、哲學や文藝の影響を受けてのことではあるが、それをこゝに至らしめた

所以のものは研究者各自が自己に目覺め多年の傳統を破つて新しき天地を開拓しようとする努力の結晶であつたことを忘れてはなるまい。

とはいへ、生命の意義、生命の實體については、何人も口を緘して語らうとしない。たゞ靈妙幽玄、侵し難きものとして秘めおくが如き態度を持してゐた。そのくせ口を開けば生命を叫び筆を執れば生命云々ともせず、恰も生命の語を用ひざれば研究者にあらざるかの觀を呈した。かくして、人々は再び混沌の淵におち、小心な實際家は或種の恐怖感にさへおびやかされるに至つた。

それもその筈、生命なる語には、東洋独自の或神秘感が伴はれ、悟入悟道の苦行をさへ聯想する先入觀がある。したがつてこの語の内容を明かにしない限り、依然として混沌彷徨の域を脱しないのは無理からぬことである。

いついかなる時代においても然りであるが、研究者が無暗と新しき言葉を使用し、分りもしない學説を引用することを、一かどの學問と心得、新知識として迎へる傾がある。この時代でもやはりさうで、——今もさうであるが——進歩したのは外観だけのことで、その内實に至つては依然混沌であり、彷徨であつた。たゞいひ

方が以前と違つたといふだけで、内實の進歩は認められない。舞臺に出て來る場面が違つただけで場面を異ならしめる理由が微塵もなかつた。

生命といふこと この唯一の標語ともいふべき生命に意義づけたものは、生命の哲學であり、生命の文學であつた。

全一的な、流れて止むなき、生きた生命を目標とする、いはゆる生命の文學は、デルタイやシュプランガーなどの生命派の哲學の目ざすところと靈犀相通するところがある。デルタイが生命そのものゝ認識において、フェルシュテューエン（體認）の方法を打立てたのも、自然主義以後の文學が生命を重視し、人間性の深みに沈潜して、眞に自己の生きる道を發見しようとする努力した態度も、その精神とするところは相似てゐる。

然らば生命とは何？……生々進展して止まない、そのもとをなすもの……生きてゐるもののみが内觀し得べきもので、生存の元力、自己の本體——意識精神といふよりも、もつと具體的なより現實的な意義を有してゐる。生々流轉はその

相で活潑々地はその實體である。

ベルグソンはいふ。

……静かに自己の存在を内省すると、例へば自分は先づ一状態から他の一状態に絶えず移つて行く。温かさを感ずる、寒さを感ずる。嬉しい、悲しい。何事を爲すか、爲さざるか。周囲の事物を眺めるか、又はその他の事柄を考へるか。兎に角さまざまの感覺、感情、執意、觀念——これらが自分の存在を區劃し、且つ存在そのものに一定の色彩を附與する變化の諸相である。自分は絶えず變化してゐる。然り、この變化といふことに深い意味がある、普通に考へられるよりは一層深い意味がある。

予は今、自分の心的状態の一つ／＼が恰も一團を成してゐる別々の一體であるが如く語つた。變化するといふものゝその變化は實は一状態から次の一状態に移る途上に存するが如く感ぜられ易い。各状態は、個別的に觀察され得るもの、絶えず一定不易の状態に静止するものゝやうに考へられ易い。然るに一層深く注意して見れば、凡そ如何なる感情も、如何なる觀念も、如何なる執意も、一瞬間の間なり

とも變化しないものは決して無い。若し變化といふことが、全く心的状態に無くなつたならば、その『連續』といふことも憩んでしまふに相違ない。例へば一見變化を缺いてゐる如く見える状態、即ちかの静止してゐる外物に關する視覺に就いて考へて見よう。假に外物は少しも變化しないとす。又自分は同一側面から同一角度と同一光度に於てそれを眺めてゐるとする。それにも拘らず自分の腦裡に映する物象は、一瞬間前のものと後のものとは既に違つてゐる。一瞬間早いといふだけにても、既に彼れと此れとは違つてゐる。記憶は過去の何ものかを、必ず現在に扶植する。我が心的状態は時の進むにつれて次第に累積し來たる『連續』のために、間斷なく増大して行く。さながら彼の轉々して次第に嵩ばり行く雪達摩の如きものである。若し夫れ一層深い内的状態、即ち視覺の如く不變の外物に應ずるにあらざる感覺、感情、欲望等に至つては、この特徴が更に甚だしい。これが心的状態の實相である。けれども普通には便宜のために、暫らくこの不斷の變化を顧慮せず、單に顯著なる變化のあつた場合、身體や注意作用に影響を及ぼし來るほど著しい變化のあつた場合のみに注意する。かゝる場合に於てのみ吾人

は自己の變化したことを認めるのである。然しながら實際に於ては吾人は單にかゝる場合のみに限らず、いつも絶えず變化しつゝある。然り、一心的狀態が既に變化そのものに外ならない。……………と。

又曰ふ、

……………一狀態から他の一狀態に移るといふことゝ、同一狀態に靜止するといふことゝは、その間に何等根本的區別が無い。同一の靜止狀態と感ぜられるものが實は複雑な變化に富んだものであり、又一狀態から他の一狀態に移るといふことは、さながら一狀態の延長に過ぎない如く感ぜられるものであることを思へば、兩者は決して截然區別さるべきものでない。たゞ平常吾人は不斷に變化する各種の狀態には留意せず、單に強烈なる變化の起つた場合にのみ注意するが故に、恰も突然新しい一狀態が前の狀態に繼いで起つたやうに感ずる。而してこの新しい一狀態も亦等しく不變なものゝ如く感ぜられ、更につぎの狀態も同じやうに感ぜられる。されば吾人の精神生活が一見斷續的に見えるのは、注意をばらばらに集中することから起る現象で、實はその全體は連續した一體の緩やかな勾配に

外ならない。たゞ注意作用が斷續的であるため、さながら斷續した別々の狀態を見るが如く感ずるに過ぎない。もちろん吾人の精神生活には、豫期しなかつたこと、又は偶然の出來事が多い。それがために、前後には何等一定の連絡が無いやうに見える場合が幾らもある。然しながら、これら偶然の事變とても、實は連續してゐる一大背景のおもてに描き出されたもの、この背景あるが爲めに初めて個別に感ぜられるものであることを知れば、これら斷續的の事變は畢竟諧和樂中の彼方此方に起る太鼓の響の如きものに過ぎない。通例吾人はこれらの響にのみ注意を奪はれるものゝ、これらの音響も畢竟全精神生活の流動體の中に支持されてゐるものであることを忘れてはならない。これらの事變は、全體中のたゞ一點に過ぎない。各瞬間は吾人が感じ、想ひ、若くは意志する全體の流轉中のたゞ一點に過ぎない。この全體の流轉こそは、眞實の意味に於て、一瞬間の心的狀態そのものを形成するものである以上は、各心的狀態は、決して獨立別個のものではなく、むしろ互に連續して流轉し行くものといはなければならぬ。……………と、
更に生命派の哲學の教へるところによれば、

……自我の根柢には現象ならざるもの——かゝる一切現象を生産する或ものが存在する。生命即ちこれである。生命は知識ではない。それは世界の意味を理論的に示すことは出来ない。生は生である。それはたゞ生きることによつてのみその力を發揮するものである。即ち表現が生の特徴である。生活することによつて何ものかを表現するのが生命である。したがつてその表現は知識的又は科學的ではなく、飽まで活きた生そのものに外ならない。眞實な生そのものによつてのみ我々は世界の眞の意味を味ふことが出来る。……

……生命の本源である力は、自然的な本能的な衝動そのものであつて、決して明確な理知の作用ではない。理知は生命力の一部面の發達であつて、生命力そのものは、むしろ非合理的な多分に感情的な本能的な突進力にしか過ぎない。しかもこの本源力は無限の生命現象を造り出す無限の創造力を備へてゐる。それは非合理的な無限創造の力とも解釋されるであらう。……と。

かくして人々は心の奥底にひそむ自己の本體を確め、直にその本體に肉薄するのを生命成長への過程と見做し、體認深化の作用を以てその手段とするに至つた。

こゝにおいて文の本質觀も亦一段の進展を見た。すでに自己の本體、生命の實相をさぐり得た實際家は、その表現になる文を、これまでのやうに、思想感情の表現といった單なる解釋では満足されなくなつた。もとより形式的にはさう考へても差支ないかも知れないが、思想といひ感情といひ、もとゞ生々流轉して止まない活潑々地の生命のあらはれに過ぎないことを思へば、何となく空虚な、ある物足らなさを感じざるを得ない。思想とは何？……感情とは何？……何れも流れて止まぬ心のあらはれではないか、流轉常なき生命の一ポイントに附した名前に過ぎないではないか、今や文を生命の表現と見、心の形象と觀じた人々は、その奥底に流動して止まぬ生命の存在を見逃すわけには行かない。さうして思想といひ、感情といひ、乃至その表現といつた、ありきたりの語の使用に満足せず、端的に生命又は自己の文字を表現なる語に冠するに至つた。

三

表現とは何ぞ 文は生命の表現であるといふ。しかし、人間一切の活動は表現

ならざるものはない。立つも坐るも、笑ふも泣くも、一舉手一投足、すべてこれ生命の活動ならざるものなくしたが、つて又生命の表現ならざるものはない。たゞ完全なる表現をなすには十分なる内省を必要とする。かく内省し組織することによつて、生命ある一思想體系を構成し、それが言語によつて表出されて談話となり、文字によつて文章となるのである。

表現は便宜上これを内外二つに分けて考へることが出来る。——本來不可分のものではあるが——即ち内的には直に生命活動そのものを意味し、外的にはそれが外部に表出される場合の形式如何を意味する。顔容もあらう、動作もあらう、音聲もあらう。だが何れも生命の躍動さながらの表出であるのはいふまでもない。これを文の場合に就いていへば、内に脈打つ生命の躍動があり、それが言語文字の形式をかりてさながら外にあらはれたものを文又は文章と名づける。——私はさながらといった。躍動さながらである。内に脈打つ生命の躍動さながらの表現でなければ文とはいへない。

表現そのものが、かく痛切至純なものでありとするならば、その外的表出になる

文も亦作者にとりては平一面のなまやさしいものではないわけである。——思想感情の表彰乃至表現といった——即ち文を通してその奥底に脈打つ作者の生命の躍動を意識するでなければ、真にその文を読んだものとはいへない。しかし、それはどこまでも文を通して行はるべきもので、作者はともあれ、読者としては客観的存在である文を介して然るより外はない。こゝにおいて、客観的文化財としての言語文字、乃至文の意義が生れて來るのであつて、文は作者からいへば生命の表現であるが、と同時に、他に對しては獨立した客観的存在でしかあり得ない。だから読者としては、たゞその客観的存在に過ぎない文を、客観的存在としてながめるだけで満足されるかどうか、新舊讀方觀の相違といつてもいゝ。

新興の讀方教育では、客観的存在である文の普遍妥當性をみとめると同時に、その個性乃至生命——碎いていへば、それを通して作者の生活を直視し、その奥底を流れる生命活動を洞見し、更に進んでは、自己の生活、自己の生命にまでおし進めようとする。かくして『自己を讀む』といふ主觀本位の文章觀は、一轉して客観性を包攝した『表現』乃至『形象』を讀むの思想へと進展した。

文の客観性 文の本質は何としても心さながらの表現でなければならぬ。脈打つ心——やむにやまれぬ生命の躍動——そのまゝの表現でなければならぬ。だが、すでに作者の手をはなれて、一個の文として読者の前に投出された場合には、單なる文字群としての客観的存在でしかあり得ない。したがつて、それを讀む讀者としては書かれた文字、又は印刷された文字文章の頁に向ふといふことが第一歩であつて、行を追ひ一字一語を辿る間に湧起する聯想活動が意味内容を構成するのである。これは殆んど説明を要しないくらい極めて常識的のことではあるが、しかし文を讀む誰もが必ず經驗すべき心理的過程なのである。文意の直觀といひ、表現乃至形象を讀むといひ、これを心理的にいへば何れもこの場合における聯想活動に外ならない。

文を獨立した一個の客観的存在としてながめるとき、これに接するものゝ先づ最初に見るものは視覺的な感覺である。それは音の符號であり音の代表である文字の連續で、——意字の場合には一字で或意味を表示する——幾個かづゝ集つて

言葉をあらはし、それが連續して、句をなし、文をなし、文章をなしてゐる。この際、最も見逃しがたい要件は、その要素ともいふべき言語や文字が萬人に認められた約束的のもので、しかも、それが連續集團して、文をなす際にも一定の社會的な規約が儼存してゐるといふことである。即ち言語や文字が制約的であり、その配置や連續に一定の法則——語法や文法や文章法などの——があるといふことである。これがいふところの普遍妥當性で、これがあるが故に讀者と作者とは、思想的に——文を介して——交渉することが出来るのである。無論文をなす場合の作者としては、たゞ表現しようと思ふことが、頭の中に渦巻いてゐるだけで、文の組織も、その制約も、殆んど無意識的に繰返されるのが普通ではあるが、初めて文に接する讀者としては、どこまでも一個の客観的存在として、先づその制約にしたがつて、そこにあらはれた意味——意味内容——を正しく理解しなければならぬ。したがつて、文を讀むことの第一歩は、客観的存在である文を對象として、表現それ自體の意味をつかむことから出發しなければならぬ。

この點現象學の教へるところにしたがへば、更に明瞭である。山内得立博士は

いふ。

……意味とは何であるか。人は言語を發することによつて或意味を表現し、文字を書取ることによつて或意味を描かうとする。言語が物理的振動と考へられ、文字が化學的變化と考へらるゝ限り何等の意味をもつことはできぬ。音響の振動が何等かの對象を指示し、紙上の黒色が何物かの記號であると考へられた時、それ等は初めて意味的存在となる。故に意味は一種の表現である。意味の表現は言語に於て言表と名づけられる。言表とは表現の一種であるが、例へば身振による表情の如く暗黙の中に意味を表現することでもなく、常に言語又は文字による意味の表現である。言表は通常記號と同一視せらるゝやうであるが、しかし凡ての記號は言表ではない。記號は或物に對する記號であるが、凡ての記號が意味を有つてゐるとはいへない。記號によつては記載されたものと意味せられたものとが一致しない場合が往々にしてある。例へば日章旗は日本國を象徴してゐるが、その記號する所は太陽によつて示された一つの事物であるであらう。亡き人の記念として綴られた文字は直接には或文字の意味を表はしてゐるにすぎない。

記號が表號又は表徴を意味するとき、それらと言表との距離は更に大となるであらう。一般に記號は言表と同一ではなく、言表を記號の一種と考へることも正當でないであらう。記號とは蓋し一つの事物が之を知る人に對して他の事物の存在を想起せしむる動機を與へることに於て役立つところのものをいふのである。日章旗が日本國を象徴するのは、たゞ我々が前者によつて後者を想起すべく習慣づけられてゐるが故であるにすぎない。客觀的にいつてこの二者が必ず結合すべき必然性はないのである。そこに何等かの必然性があるとすれば之を制定した立法者の意志か或は歴史か又はこの二者を常に聯想する我々の習性かの孰れかにすぎぬであらう。一者は他者を指示するかもしれないが、決して之を證示しはしない。反之、言表に於ては必ず何等かの對象が必然的に結合する。我々が机を言ふとき必ず机が指示せられ、机の意味がそこに言ひ表はされてゐるであらう。机を言ひながら机が之に對應しないか又は他の事物が之に對應するときは、それはもはや机を言ひ表したものでないであらう。言表の本質は言ひかけの言葉に於て最もよく現はれる。我々が他人に言ひかけるのは之によつて或事を言ひ

表し、それに或意味を與へて之を聽く人に傳達しようとするのである。聽く人はそこに言ひ表はされたる意味を理解するであらう。即ち話す人は或意味を告知せんとし、聽く人はこの告知を受取らうとするのである。さうしてこの交互作用に於て意味は一つの共同財となり、言表は一つの社會的現象となる。意味は勿論話す人によつて與へられるのであるが、聽く人によつて受取らるゝ限り、もはや話す人の個人的所有でも、又話す人の心理的作用でもない。意味は話さるゝことによつて社會に送り出さるゝや否や之を話す人から獨立してそれ自らの存在と運命とを擔ふに至るのである。かくして話されたる意味は一つの客觀的存在として聽く人をばいふまでもなく、却て話す人をさへも束縛するに至る。話す人は之を話しながら或事を言表し、聽く人は之を聽きながらその意味を理解するのである。意味の世界が物理的存在では勿論、心理的作用とも異なつた、それ自らに獨立なる存在であることは此點からしても十分に證明し得られるであらう。聽く人が話す人を理解するのも、嚴密にいへば決して彼が話す人を理解するのではなく、話者によつて話され、さうしてその限りに於て共同財となつたところの意味を理

解するのである。この意味を理解するためには、無論聽く人は話す人を眼にて見話されたる言語を耳によつて聽かねばならぬ。併し聽く人の此等に於て見、そして聽くものは話す人の個人的存在でなく、共同財としての話されたる意味でなければならぬ。若し然でないならば人間の世界に於て共通なる理解は不可能であらう。聽く人は話す人を、逆に話す人は聽く人を物理的存在として、はなく、人格として之を見、之を聞く。人格として之を見、聽くといふは話す人を、聽く人を、話す音を、聽く作用を、凡て意味の統一に於て結合する事に外ならない。

我々が他人を理解するのもかくの如き意味の統一によるのである。聽く人が話す人を了解するのは、話す人の言表によつて或は之を機縁として共同財に參與するのである。嚴密に云へば一つの意味に就て他人が如何なることを理解するかは直接に知覺し得られない。我々は他人の理解作用を十全に體驗することはできない、之を體驗し得たと思ふのはたゞ聯想か類推かの結果にすぎぬであらう。にも拘らず我々は他人の言表によつて、或は表情によつて他人を認識し得たと信ずる。我が存在し我が思惟し情感し意志する如く、他人も存在し意識すると信ず

る。この信仰は、私の存在と同じく本能的である。フォルケルトの云ふ如く汝の確實性は私の確實性と同じやうに本能的でなければならぬ。我は如何にして他我を認識し得るのであるか。それは或人の考へるが如く本能によつてあるか。他人の存在が私の存在と同じく本能的であり、しかも両者が全く別の存在であるとするならば、我々は永久に他我の精神生活を知ることができない筈であらう。我々は正しく他人の心的過程を十全に體驗することはできない。併しそれにも拘らず我は他人を理解し得たと云ひ、又しか信ずるのは何によつてあるか。我が他人の表情を見又は言語を聞くときは、此等の感覺は先づ外的に知覺せられるであらう。併し表情の知覺又は言語の感覺はたゞこの外部知覺に止らない。人は言語の知覺と同時に或意味の理解を有つ。否言語は何等かの意味を表出するものとして、そしてたゞかくの如きものとしてのみ言語たることができるのである。意味の表出でない言語はたゞ音響の振動にすぎない。否之を音響といつてさへ既に一種の意味を表すであらう。他人について我々に與へられる所のものは、たゞ身體的現象のみであるといふのは獨斷である。人は笑に於て喜びを、涙

に於て悲しみを、赤面に於て羞恥を、一般に表出に於て何等かの意味を直接に知覺するのである。言語とはかくの如き現象の最も代表的なるものゝ一つであるに相違ない。我々は他人の言語を聴くことによつて直接にはたゞ音響を知覺するだけであるが、しかしそれと同時に、否それにもまして直接に或る意味を理解する。意味は無論話す人の言語の中に在るが、しかしそれと同時にそれ自らとして獨立なる存在を有つてゐる。意味は話さるゝことによつて之を話す人から獨立して一つの共同財となる。聴く人が之を理解するのはこの共同財に與かり、話す人と聴く人とが理解し合ふのも共にこの共同財に參與するからに外ならない。我々が他人を理解するのも専らかくの如き手續によるのである。意味について我の理解する心的作用は他のそれとは異なつてゐるかも知れない。否我々は嚴密にいつて他人の心的生活を十全に體驗することは不可能であるであらう。しかしそれにも拘らず我が他人を了解し、他人が我を知得るのは、意味が我と他人との心的過程又は理解作用からは獨立なるそれ自らの存在を有するからであるに外ならない。……と。

表現を讀む 我々の心は——生命は——流轉止みなき活動そのものを意味し、寸時も停止するものではない。ベルグソンがいふいはゆる流動的進化である。だから形がない。例へば奔流岩をかむ急流の如く、雪と散り玉と碎ける溪流の如く、常に流れ常に動き、流轉止みなき活動そのものを意味してゐる。しかも流れては川となり、よどみては淵となる水のその如く、或原形があつて然るのではなく、たゞ流れたゞ動き、流轉止みなきもの、それが心であり、それが生命なのである。流れそのもの……動きそのもの……活動そのもの……それが心の實體であり、生命の實相なのである。だから、心は——生命は——對象なくして單獨に存在するものではない。常にある對象を求め、それに働き、それに作用して始めて意義がある。したがつて生命活動の實相を知るには、對象に向つて働きかける働きそのもの、作用そのものを凝視しなければならぬ。そこには生命の躍動があり、心の灼熱がある。

これを文の表現についていふならば、作者のやむにやまれぬ生命の奔騰があり、脈打つ心の雄叫がある筈である。表現を讀むとは、かうした動きつゝある作者の

心と對象との交渉如何を讀むことを意味する。形象を讀むの意も亦これに外ならない。

この場合讀みの當體は自己であるが、その對象たる文はすでに作者の手をはなれて、獨立した一個の客觀的存在として讀者の前に現前する。だから、讀者と作者との交渉は、文を機縁とし讀むことを中心にして開始されるもので、文を離れ讀むことを別にしては、兩者は全然沒交渉の關係にあるのはいふまでもない。この意味において文の客觀性が殊更に重視されるわけで、讀者はたゞその文を機縁として……その文を通して……作者の心の動き——生命の躍動——を直視するの外はない。かくして、その片言隻語が生命の息吹であり、心の躍動であることを意識するとき、一字一句がおろそかにされないことになるのである。

四

形象といふこと 形象といふことばは近頃しきりに使はれてはゐるが、その語義はまだはつきりしてゐないやうである。學者によつてもまち／＼であるし、使用

若も亦思ひくゝに自分勝手な解釋で分つたやうな分らぬやうな曖昧模糊の間を彷徨してゐる。或人はこれを文の形又は姿と解して著しく外形的の見解に囚はれ、或人はやゝ内面的な意味を添へて、これを文の姿態と解してゐる。しかし多くはこの語が暗示的で各種の聯想を隨伴してゐるのと、その主唱者が當代一の國語學者であつたのが現代人の心理に適合して、たゞ漫然とその語感に陶醉してゐるといふのが實狀ではあるまいか。

いつたい形象なる語は文學乃至美學に用ひられた語で、土井光知氏はその著『文學序説』に次のやうに述べてゐる。

……普通用ゐられてゐる形象の意味は、或物體から感覺的に與へられたもの自らなる最も具象的な統一である。そして形象を抽象的に考へて資料或は内容から區別せんとするとき形式或は外形といふ。ベルグソンは形について次の如く説明してゐる。――

――生命は進化である。我々はこの進化の一時期を靜觀に集注して『形』といふ。そして變化が我々の知覺の幸福なる惰性のうち勝つほど顯著になるとき我

々は現物體が形を變へたといふ。しかし物體は刻々に其の形を變へつゝある。嚴密にいへば形を持つてゐない。形は不動であつて、實在は活動であるから實際にあるものは形の連續的變化である。形とは移動するものゝ早取寫真觀である。こゝにも我々の知覺は實在の流動的持續を凝固せしめて斷續的の心像にする。この次々の心像があまり多く相違しない時、我々は單一な中庸の心像が消長しつゝある様に考へる。そして我々が事物の心髓、物それ自身といふ時は、實際はこの中庸を指して居るのである。――

常識は運動そのものに興味を有せず、運動の目的結果のみに注意する。緑が黄や紅に變ずるやうな質的運動、花が果實となり、毛蟲が蝶となる進化的運動、飲食し旅行し讀書するが如き行爲においても、常識は常に形式と目的とのみを考へるために流動を没却する。そして流動と形象とを二元的に考へて居るため、突然運動を考へるやうに強ひられると、かの早取寫真的形象が外からの動力によつて活動寫眞の如く斷續的に現はれるやうに想像するのが常である。我々はかゝる形象から流動の考に透入することは不可能である。

かゝる形象が流動を没却するとすれば眞に思考し又美を見んとする人々にとつて形象は邪魔物であり誘惑である。我々はまづ感性の眠たげな遲鈍を破り、その表面に凝固した習慣を去り、固定した概念や形象の無秩序なる推積に満足せず、事物の微細なる運動推移をも適當に精密に、潑瀾たる興味を以て追跡し得る流動性、變通性に富んだ思想上の習性透徹し得る感受性を養ひ無限に複雑な活動の連續を通じて奏せらるゝ諧音をきゝ、端より端にわたり萬物をうちから美しく、力強く統率して行く理法に達しなければならぬ……

ギリシヤ人に藝術的創造の秘密を尋ねたならば『それは夢の如くに形象を直視することである』と答へたであらう。ゲーテは『藝術家は眼を以て觀念を見る人である』といひ、ロダンは『藝術は觀照である。それは自然を透徹するところの精神の喜悅であり、又自然がそれ自身を活かす所の眞意を見抜かんとする精神の喜悅である。藝術は天地萬物の中に明かに見られる知識の歡喜である』といひ、クロオチエは藝術的活動は直觀である。直觀は同時に内的表現即ち形象であるといひ、この内面的形象と直觀との一致を以て彼の美學の基礎としてゐる。……

形象とは内容の統一そのものである、故に内容と分離して考へることは出來ない。然るに藝術は皆異なる經驗を資料とする。ある畫家が虎を畫き、その後輩がまた虎を描くにしても、虎なる統一意識の内容は決して同一ではない。近松の思想は必然的に近松の形象となり、シェクスピアの思想はシェクスピアの形象とならなければならぬ。しかのみならず、同一の藝術を對象としても、人により時により體驗する藝術的形象は決して同一ではない。藝術的形象はこの意味において二重に個性的である。さればそれを比較して優劣を論ずることは、烏と鳶と何れが完全であるかと問ふやうなもので無意義である……と。

これを見ても知られるやうに、いふところの形象は不可視的なもので、一般に解釋されてゐるやうな固形的な概念のそれではない。即ち氏は形象を内容の統一そのものと解してゐる。

なほ外山卯三郎氏は現象學の見地から次の如き説明を與へてゐる。

——私達は作詩現象における根原を『詩的直觀』と見るのであるが、詩的直觀とは一つの感性を意味しなければならぬ。この感性といはれるものは、全く渾沌

としての全體なものでなければならぬ。言ひかへれば、それは全體的な氣分といふことが出来るだらう。氣分といつても、それは單なる浮薄な氣持ではなくして、むしろ藝術體驗といつた方が妥當であるだらう。

このやうな感性をもたない詩人もなければ、又藝術體驗をもたない作家もあり得ないだらう。それと共に觀照される場合にも亦、この藝術體驗が感受されなければならぬだらう。即ちフォルケルトのいふやうに、觀照者の心に描かれる『内的形象も特殊な藝術作品である』といはれる意味もこゝにあるだらう。しかし私達のいふこの全體的な詩的直觀そのものは、一つの渾沌とした塊であつて、それは未だ形象以前のものであり、形象が感受さるべき母胎でなければならぬ。私達はこの渾沌としての直觀に、表現さるべき客體としての形象を感じる事が出来る。即ち渾沌たる母體としての直觀に對して、私達は『直觀形象』といふことが出来るだらう。これは作詩者によつていはれる『形象』に相等するものであつて、この形象が描かれる星雲のやうな渾沌としての直觀が、詩的なものである場合に私達はこの形象を『詩的形象』と考へることが出来る……と。

しかしてこの語を國語學に取入れ、國語教育上に適用したのは垣内松三氏であらう。氏は實にこの語の始唱者——國語教育における——であり、また主唱者でもある。

雪片を手に執りて、その微妙なる結晶の形象を見んとする時、温い掌上に在るものは唯一滴の水である。文に面して、作者が書かうと思つたものを捉へやうとする時も、文字に泥むならば、そこに在るものは、既に生命の蒸發し去つた文字の連りである。微妙なる結晶を見るには、硝子板に上げて顕微鏡下に結晶の形象を視なければならぬやうに、文の真相を觀るには、文字に累はさるゝことなく、直下に作者の想形を視なければならぬ。文の解釋の第一着手を、文の形に求むるといふ時、それは文字の連續の形をいふのではなくして、文字の内に潜在する作者の思想の微妙なる結晶の形象を觀取することを意味するのである。——『國語の力』——

これによると、形象は文の形や姿をいふのではなくて、その奥に潜在する作者の

想形即ち心の形を意味してゐるやうである。なほ氏の近著『國語教授の批判と内省』には、一層明瞭にそれを意義づけてある。

——文の意味を音韻又は文字に導くものは言語である。言語(叙述作用)は意識の構成と傳達を可能ならしめる表現作用である。考へたこと感じたこととに形を與へ形の上にそれらを十分に生かす作用は、心の深底において相互に働きかける作用であつて、それを統一する力は意志である。形象はさうした統一の姿である。——

——文において対象と言表とは、相關聯した一の作用である。この作用を統率する作用は形象である。文を表現作用の立場から見る時に、形象の内面には対象が依存し、形象の外面には感覺的質料としての文字がある。——

——意識の飛翔の姿を文字の底に見出すためには、対象と表出との融合點に立たなければならぬ。單に文の素材としての対象を見ることでなくして、そ

の内在的対象を見なければならぬ。又表出の感覺的手段を見るのではなくして、生命の内蔵せる表出を觀取しなければならぬ。こゝに兩者の融合の境地がある。——

氏のいはゆる形象が何を意味するかは、これでほとゞ明瞭になつたことゝ思ふが氏は更に形象の流動といふことについて、

——讀むといふことを、形式から内化した形態に置き、更にそれより一步を進めて、又はゆるる内容よりも深められた生命の直觀に達せしむる時、それを統合する作用を形象といひ、更にそれを固定したものとせずして、内外融合の作用と見る時に、特に形象の流動といふのである。——

——普通の考方では、内容と形式とを平面的に並立させ、やゝ進んだ考でも、對象(内容)と言表(形式)とが立體的に従屬するものと考へられて居るが、それらの作用を渾融する作用の作用としての形象の流動を考へることが出来る。

唯研究の便宜上、対象と表出を抽出して考察することはできるが、文の本質を
會得するためには、その作用において見なければならぬ。――

と教へてゐる。この場合、いふところの形象の流動とは、内外融合の作用、即ち内在
生命の躍動を意味するやうである。約言すれば文の底に流れてゐる意識の流動、
平たくいへば作者の心の動き、それに形を與へたものが形象であり、その生々流轉
の相を特に形象の流動と名づけてゐる。

とにかく、この語は美學乃至文藝哲學から來た言葉で、その意義の深遠なのは、い
ふまでもない。したがつてこれを讀方の指導原理として使用するには、可なり學
的精選を経た後でなければならぬ。それにもかゝはらず、漫然とその語感に酔
ひ、徒らに流行を追ふて走るが如きは、嚴にこれを慎まなければならぬ。

今泉浦治郎氏は、これら淺見の徒を戒めて次のやうにいつてゐる。

………形象といふ言葉は、詳しくは美的形象といふ。これはドイツの美學がい
ひ出した名辭で、建築、繪畫、彫刻等所謂造型美術の作品を呼ぶ言葉をすべての藝術

に適用して、我々でいふならば美しいゆかしい『もの』といふところをかういつた
だけである。だから英語では美的なフォームだとか、スタイルだとか、イメージ（心
象）とかいつてゐる。『藝術とは形象を求むる運動だ』とは美しい姿形を創造す
るはたらくだといふことである。文藝の如き、イメージ（心象）を媒質として吾人
の生活經驗を意味づけるはたらくにおいて、美的形象などいふ言葉を通俗解釋で
使ふからとんだ誤解を招くのである。………

科學や實用の敘述が事物をその構成要素の分析的地位において（即ち死物と
して、一つの手段として）取扱ひ、そのため勢、知的計量的に走り、感情が剝脱して人
間味を失ひがちになるのを嫌つて、藝術では事物をその渾然たる存在の *being* な
姿態において觀照し、人間的感激を自由に十分に發揚流露せしめようといふとこ
ろから、美的對象を『形象』と呼んで事物の綜合的、自依的ないはゞ生きてゐる力と
して、魂として意味として、宇宙大我の一啓示として、純粹直觀しようといふのであ
る。つまり事物の正體を觀味はう、體驗しようといふのである。だからこの『形
象』は通俗の場合に我々が分析的、實用的に意味してゐる事物のかたち、又はすが

たではなくして、我々が散歩に出て、一日の浮世のさがを忘れ、自分さへも忘れて、鳥の音に聴きほれるとか、落日に染めなされる東の山脈に見入るとか、小川のほとりの野茨の花に恍然たる時とかいふやうな時に、吾人の魂に焼付いた事物の形態、風姿である。これを藝術論では事物の正體と考へてゐるのである。我々が所謂美の成立つには、美的對象と我々とは融和合一せねば出来ぬこと故、この場合、美的現象の要素を考へるには、美的對象及び觀照主觀といふ相對重點を云々するのであるが、我と事物とをいつまでも對立せしめたでは、美的の世界は生起しないから、そこで我と事物とが純粹直觀において融合渾一しいはゞ動靜一如の涅槃境地に絶對の生活活動を體驗する状態を『形象』といふ言葉で言表したのである……と。

これらの諸説が、現象學派の哲學に基礎をおいてゐることは、いふまでもないことであつたが、つてそのいはゆる形象も純粹直觀によつてのみ得らるべく、最もよく直悟默會することの出来る人にのみその實體があたへられるといふのである。垣内氏の雪片の引例も亦この境地をいつたものであらう。

五

現象學的考察 順序として先づ現象學がどんな學問であるかを明かにして、然る後、それが讀みの本質究明の上に如何なる關係を有するかを考察することにしよ

う。

いふところの現象學は極めて最近に認められた學說で、フライブルグ大學教授エドムンド・フツセルによつて提唱され、現今ドイツにおいても若き哲學の稱さへある。尤も西田博士の説によれば、現象學はボルツァノやブレンタノーからトルドゥスキヤを経て生れたものといはれてゐる。

現象學といふ名稱は『當體そのものへ』といふ一の原則を表彰するもので、一切の假空的構想や偶然的發見を排斥して當體そのものをつかまんとすることを意味する。いつたい現象といふ語意は、そのもの自身において自らを現はすもの、即ちあからさまのものといふことである。だから現象學において現象といふのは、それ自身においてあるがまゝに自らを現はすものを意味する。したがつて現象

學とは、現象をそれ自身からあからさまにすること——本質記述——約言すれば「當體そのものへ」を意味することとなるのである。

讀みの本質究明の上に現象學の貢献するところは、讀みの當體即ち何を讀むかの問題で、そのいはゆる本質直観はいふまでもなく、ボルツァノがいふ表象自體乃至文章自體、ブレンタノーがいふ意識の志向性などは最も深い關係を有してゐる。以下主として西田博士の説くところに従つて解説を試みることにする。

ボルツァノに従へば、我々の種々の表象や判断に對して、これらの心理作用を超して、その對象となる表象自體とか文章自體といふものがなければならぬとする。文章自體は表象自體から成立し、文章自體の中で實在的存在をもつたものだけが眞理であるといふのである。一つの命題又は文章は種々なる立場から見ることが出来る。これを紙の上に記述された文字の集合として見れば物理的存在であり、我々の理解する思惟作用として見れば心理的存在である。しかしこれらの見方から離れて、文章を意味の表現として見ることが出来る。かくの如く命題の意味を文章と見る時、これを文章自體といふのである。だから判断とも異なる。

判断は與へられた命題であつて文章自體ではない。文章自體は存在せぬものであつて、即ち意味の世界である。それ故言表による思惟作用によつて考へることは文章自體の本質をなさない。形式が内容にあてはまつて眞となるのではなく、形式がそれ自ら眞であるから内容を得て眞となるのである。

ボルツァノの説は今日の所謂純論派の人々のやうに全く認識作用の分析をすて、純論的に表象自體といふものから出立してゐるが、心理現象の内省的分析から出立してボルツァノと同様の考へを出した人はブレンタノである。

ブレンタノの心理學の根本的思想は、精神現象と物質現象との區別である。彼は精神現象と物體現象との區別は、現象そのものの中に對象を含むと否とにあるといふ、即ち精神現象の特徴は昔のスコラ學派のいつた如く、對象の内在といふことである。意識するといふことは對象即ち意味を自己自身の中に含むといふことである。それですべての精神現象は二つの方向から成立つてゐるといふことが出来る。その一つは色とか聲とかいふいはゆる意識内容即ち内在的對象であり、一つは表象とか判断とか感情とか意志とかいふいはゆる作用の方面である。

さうして彼は表象作用を最も根本的と考へ、判断とか感情とか意志とかいふものはこれに附加せられたものと考へてゐる。それ故彼のいはゆる内在的對象即ち内容といつてゐるものは、全くホルツァノの表象自體とか文章自體とかいふものを内在的に考へたものと思はれる。兩人の相違は、一人が論理學者として超越的に考へたものを、一人は心理學者として内在的に考へたまでである。

現象學で最も重要な意識の志向性といふことも、やはりブレンタノの創見である。現象學では意識の一般本質は志向性であるといふ。志向性とは意識せられるものを意識することである。田邊博士によると意識が何等かの對象を含み、對象を志向することは精神現象の物理現象と異なる所以である。志向といふ語義は意識がそれに志し向ふことである。いつたい意識といふからには、何物かについての意識がなからねばならぬ。即ち特定の對象に關與するといふのは勿論外的のものでなく内的のものであるから、意識自體の中に對象を含みその對象に意識が志向することではなからねばならぬ。これを内在的對象性の志向といふのである。だから意識といふのは體驗が志向性によつて連絡し統一せられてゐるも

のであるといふのである。

ホルツァノの文章自體といふのは、カントのいはゆる物自體で、平たくいへば物の生命であり、魂であり、表象の裡に秘められたいのちである。カントはこの物自體を單に外界即ち自然現象の奥底に存する本體をいつたばかりでなく、内界即ち心意活動の本體をも物自體と稱してゐる。さうしてカントはこの本質をつかむことは人間の能力に許されてゐなくて、それは一個の假定に過ぎずとしたのであるが、フイヒテ・シェーリングに至つて、これに反對して、人間には知的直觀といふ官能があつて、これによつて直接に、いひかへれば直下に、すべての抽象的又は再現的の知識に對し、又は比量的の手續を経たる知識に對して、直接に認めることが出来るとした。この知的直觀は現今の現象學でいふ本質直觀であつて、本質把握にはそれが精神生活に關係する限り本質直觀によらねばならぬものとする。本質直觀とは、平たくいへば物の本體をその在るがまゝの姿において認識し觀取することであつて、西田博士がいふ自己の裡に自己をうつすところの直觀を意味する。本質とは事實に對していふ語で、金子博士によれば、事實とは時間と空間との形

式に現はれる個々の現象又は實在的存在の意味であつて、自然界や精神界のすべての個々現象を包括する。この事實に對して、本質は個々の事實を事實たらしめるもの、それ無しにはそれ〴〵個々特殊な事實が事實として成立する能はざるもの——いはゞ事實を事實たらしめる精髓エッセンスを意味する。個々の草には『草』といふ本質が存し、個々の櫻には『櫻』といふ本質が存する。櫻が櫻たり草が草たり得る本質が存すればこそ、個々の櫻や草の事實が成立するわけである。事實はすべて時空的——その意味で實有的であるに反して、本質はすべて『非實有的』であつて普遍性と必然性とをその本性とする。普遍的な非實有的な觀念的なアブゾリアブゾリな事物のエッセンス——精粹——がいはゆる本質なのである。かゝる意味において、事實は必ず本質の中に成立し、本質は常に事實の中に存する。我々は事實の中に本質を觀、また本質なしに事實は成立し得ないから、本質を通して事實を觀るのである。事實と本質とは全く範疇を異にしながら、しかも非常に密接不離な關係にある。したがつて、本質を除外しては如何にしても事實は考へられないとフツセルはいつてゐる。

かやうに本質はそれ〴〵の事物の普遍的な必然的な非實有的な形相である。かゝる本質をば我々は如何にして把握し得るかといふと、それは事實的知覺からの抽象とか推理とかではなくして、直に本質直觀によつてと主張される。こゝに明かにフツセル獨得の見解がある。即ち、我々は個々の事實を事實として直觀し得るのは、同時に又は根本においてそれ〴〵の事實上の本質を直觀してゐるからで、その事實の事實たる特殊な本質を直觀するにあらざれば、我々はそれぞれの事實をそれ〴〵特殊なものとして知覺し得ない筈である。即ち本質直觀は事實直觀そのものであり、又それは事實直觀の根本に存する作用であるともいへよう。事實の直觀は直に本質の直觀を基礎とする。即ちフツセルは、本質直觀によつて我々にはそれ〴〵の本質が活けるがまゝに自體そのまゝの形において『與へられ』又『與へてゐる』と説明してゐる。かくして彼は、本質直觀のみが事物の本質を如實に掴み得るもので、これに比較すれば、外物の知覺とか超越物（自然物等）の知覺とかは甚だしく不確實な不明瞭なものたるを免れないといつてゐる。

現象學的方法としては、フツセルは先づ『判斷中止』と『現象學的還元』といふ研

究法を用ひてゐる。これはギリシヤの懷疑派が主張したエポケー（括弧内に入れて作用の外に置くこと、即ち判断中止）を利用したもので、一切の自然物は勿論、純粹意識を除く一切の本質（超越體としての本質）はことごとく括弧内にくゝられて判断の埒外に置かれる。「自然的態度」對「現象學的態度」が即ちそれである。自然的態度とは、すべての事物を我々に對して實在するものとして見る態度を意味し、偶然的個別的にものを考へる立場である。これに對して、現象學的態度とは、自然的態度を中止して、端的に意識の本質だけに觀察の眼を向けようとする態度を意味する。フツセルは自然的超越體の判断中止を現象學的エポケーと名づけ、超越體としての諸本質——純粹意識を除外しての諸本質、したがつてこれら諸本質に關する學——の判断中止を特に「現象學的還元」又は「本質的還元」といつてゐる。けだし自然的立場を離れんがため、判断中止即ち肯定否定の對立を無力にすることである。かくして自然的世界が排除され、盡した後に残るもの——現象學的殘餘——は本質と呼ばれる理念的な世界で、本質直觀はかくの如くして始めて可能となるといふのである。

讀みの本體 讀みの本質を現象學的にいふと、文章自體の直觀、即ち實在の實在を把握することである。文章は文章自體によつて支へられてゐる一個の實在である。だから文章を讀むといふことは、文章といふ實在を通してその實在を支へてゐる文章自體といふ無形の世界に入るといふことである。

そも／＼文を讀むといふことは、そこに書かれた文字や語句を理解するといふことだけで満足されるであらうか、文を客觀的存在として眺めると文字の連續になる一個の物理的存在にしか過ぎない。我々はかゝる文を對象として果して何を讀まうとするのであらうか——文の客觀性の條参照——讀むことが精神的の現象であり、文が文章自體といふ無形のものに支へられた實在であるとするならば、結局讀みの本體は實在の實在を把握する精神的の現象であるといふことになる。いふところの文意の把握はかうした心境を意味したもので、文を介して作者の心の動き、生命の躍動を直悟默會するの意に外ならない。

文意の把握は文章自體の把握を意味してゐる。我々はこゝにフツセルがいふ

純粹直觀、即ち本質把握の方法に學ぶところが多い。現象學特にフツセルがいふ純粹直觀は、本質を本源的所與性において、又は具體的本性の姿において把握する。したがつてそれは偶然的な個別的なものとしてではなくて、絶対に妥當するもの他たり得ないものを見る直觀であつて、直接的賦與的直觀である。

總じて文の本質は文を離れては存しないが故に、それを認識するためには、我々は先づ文そのものゝ直觀を必要とする。しかしてこの場合、文を文として見るのではなく、文の裡に文の本質を見出すものでなければならぬ。文の偶然的側面を觀ると同時に、その普遍的乃至必然的側面を洞觀しなければならぬ。

意識そのものを、純粹本質において捉へることを目標とする現象學は、理窟から推して世界を解釋して行くといつた方法によらないで、直覺的方法により直ちに物の本體を掴まうとする。東洋流の直下直悟である。物を側面から考へて見て推理付度するのではなく、直ぐその中にはいつて攫へて行かうといふのである。

いつたい、物は物として獨立に存在してゐるものではなく、我に對して始めて意味があるのである。我が認めるところの物が始めて我の研究するところのもの

である。したがつて我々の對象となる物は我々の認識するところの物に限つてゐるといへよう。現象學のいふところによると、我々が對象を對象と認めることが出来るのは意識の力であるが、意識する前に豫めそれと同一のものが内的に存在してゐなければならぬ。これがいふところの内在的對象で、この内在的對象の意識は志向性であるとする。この意味において、文を読むといふことは、それを對象と認める前即ち主客對立の以前における本末未分の世界に行かなければならぬことゝなる。それがいふところの直觀で、對象の心をつかむ唯一の方法だといふのである。

かくして我々はおぼろげながらも讀みの本體を直視し得て、在來の囚はれた思想を脱却すると共に、新なる一步を力強くも國語の大地に印することを得た。

第四 センテンス・メソッド

一

我が讀方教育が訓詁流のエルチエ式から今日のセンテンス・メソッドに轉移するまでには可なり長い年月を経過した。試みにヒューイーが讀方心理學に擧げた標準的方法なるものを列擧すると、

アルファベティック・メソッド Alphabetic method (文字本位法)

フォネティック・メソッド Phonetic method (發音本位法)

ワード・メソッド Word method (語句本位法)

センテンス・メソッド Sentence method (文本位法)

などで、文字を覚え、發音を學び、語句や文章を知る……それは恰も讀みの作用の心理的道程でもあり、讀方の歴史でもある。

アルファベティック・メソッド ギリシヤ及びローマ時代に一般に廣く用ひられ、歐米諸國でも前世紀の末までは盛んに行はれた。この方法にあつては、先づ印刷され、又は書かれた文字の名前が教へられ、次に文字のアルファベット順が教へられるのである。時としては文字の發音が教へられ、又 *phonics* の如き無意味な綴りの發音が教へられる。かうして三文字の組合せ、單綴りの語、二重綴り字音語の組合せなどが行はれるのであつて、語は普通それが發音される前に綴られるのである。この方法は、我が國において『いろは』または『アイウエオ』を排列順に教へたり、千字文を棒讀みにして漢字教育を行つたりしてゐた寺小屋教育と相似てゐるのも頗る興味がある。

フォネティック・メソッド これは主として發音法に留意して考案された方法で、言語の發音さへ正確であればよいといふ思想や要求から來たものである。

この方法は第十七世紀の頃ジャンセン教徒が貴族や僧侶の教育に用ひたもので、その勢力は前世紀にまで及んでゐた。このためには特別の印刷文字もでき、各

種の符號をも使用した。音の分解練習は、音節を訓練し耳及び新語の文字の音をいふ能力を訓練する、さうして暗示された音を混ぜ合すことによつて、その新語を發音する力を與へるのである。これは恰も我が徳川時代において、漢學塾などで漢文の素讀を教へたのに似通つてゐるのも不思議である。

ワード・メソッド 語句を本位とする方法で、一六五七年コメニユースの世界圖繪に始まる。その後多くの改良者達によつて、特にフランスにおいてはヤコットアメリカにおいてはウォセスター及びホレスマンによつて教へられた。コメニユースの世界圖繪は、在來の無味な字綴りを用ふることなしに、その繪の下に語句を配して直觀的に學ばしめるやうに工夫してあつた。

この方法においては、語の全音が語の全的視覺的形と聯結された。子供は文字の名前と同様の速さで語の名前を學び、一文字を認識すると同じ速さで全語を認識する。この場合、一語は決して文字の名前の合計ではない。又は文字の音の單なる寄せ集めでもない。その視覺的形態は、文字の形態の合計ではなくて、それ自

身の特性を有してゐる。この方法は極めて一般的に現在においても使用されてゐる。我が國においても、最近十數年前までは殆んどエルチエ式萬能の時代で、語句を本位とするワード・メソッドはその全盛を誇つてゐた。

センテンス・メソッド こゝにいふセンテンス・メソッドは、基礎的標準的方法の一つであつて、現在のいはゆるセンテンス・メソッドとは趣を異にしてゐる。アルファベット・メソッドや、ワード・メソッドなど、肩をならべたもので、文字を覺えることや、語句の意味を知ることに対して、文——こゝでは個文——それ自身の全體的意思に直入しようとする方法を意味してゐる。

この方法もやはりコメニユースによつて暗示されたものであるが、廣く世に行はれるやうになつたのは、一八七〇年の頃、ニューヨークのビングハムトン學校においてファンハムが實驗してからである。ファンハムの實驗報告は、『讀方におけるセンテンス・メソッド』(Sentence method of Reading)と題する小冊子ではあるが、今もなほこの方法に關する極めて明快なる説明書といはれてゐる。

センテンス・メソッドのいふところによれば、言語の眞の單位は語でもなく文字でもない。文こそ眞の單位であつて、思考において單位である全思想を表現してゐる。文が言語における自然的單位であるならば、文は話す場合におけると同様に、讀書の場合においても自然的單位でなければならぬ。語は文字の音や文字の名前の單なる總和でないやうに、文は語の音や語の名前の單なる行列ではない。文はその意味が感ぜられるとき、話される様態において、明かに示されてゐる意味、現れ及び明かなる全音を有してゐるのである。この全意味が讀者或は話者の意識内において明かである場合のみ、文は自然的に讀まれ或は話されるのである。したがつて、文字、要素的音、語及び語の意味に對する注意は、文全體又は全意味に對する注意によつて取つて代らなければならない。

ファンハムは實驗の結果を次の如く物語つてゐる。

……この方法を用ふるに當つて、教師は黑板をよく用ふるやうになつた。子供に興味ある何等かの目的物、又は場面のスケッチは、子供自身の考が表現をそこに導くものであるからして、自然表現と共にその文は讀まれるのである。恐らく

ば一つの短い繪の物語が終るまで、他の文は暗示され、書かれ、讀まれるのである。この物語の全部は、自然的なる表現と共に子供が間もなく讀み得るのである。時としては、遠足、遊戯、若しくは勉強に關する子供の經驗が、彼等の語る通りに書かれる。さうして子供等が讀み得るところの文に作られる。尤も最初は子供は單なる語の位置を知らない。しかし、ある時にはある語の形が屢々現はれること、及び “I have a dog” “I have a knife” などの如き入れ替へが行はるゝことは、これら個々の形を子供に注意するに至らしめる。さうして文全體はその構成語に次第に分解され、これらの語は時としてはその構成音及び構成文字に分解されるのである。かくして、それ自身の場合において、分解を行はしめて自然的表現を得るといふことを、教師達はいつてゐる……と。

要するに基礎的標準的方法としてのセンテンス・メソッドは、語句がそれ自身として意味を有するが如く、文もまたそれ自身としてのみ意味を有してゐる。したがつて、文そのものゝ意味を全體として知ること即ち文自體の全體的意味に直進して行く方法が、文を讀む最良の手段でなければならぬといふのである。

以上はヒューイーがいふ基礎的標準的方法の主なるものであるが、彼はなほこのほかにコムビネーション・メソッド (Combination method) なるものを挙げ、以上の諸方法を適宜組合せることによつて、特種の方法を組織することが出来ると説いてゐる。

二

歴史的回顧　いふところのセンテンス・メソッドは、ヒューイーがいふ基礎的のそれと趣を異にする。ヒューイーのセンテンス・メソッドは、語や句に對する文で文法上の個文に限られてゐるが、こゝにいふセンテンス・メソッドは、普通にいふ文章、即ち篇をなした文を對象としてゐる。だからいふところのセンテンス・メソッドは一篇の文章としての取扱に對して、基礎的方法であるセンテンス・メソッドの精神を適用したものともしへよう。

いつたい我々が文章に對する認識過程を、文字……語句……節……文段……文理……と順序を踏むものと信じてゐたのは、久しい以前からの傳統であつた。したがつ

て一篇の文章を取扱ふ場合の手續も殆んど一定した型が出来てゐて、動かし得ないものとなつてゐた。これはヘルバルトの五段教授法なども影響するところが大であつたと思ふが、とにかく一時間に教授し得る分量を條件として、一篇の文章を適宜分節して所定の手續を踏むことを讀方教授上の鐵則でゞもあるかのやうに信じてゐた。

當時私は——大正四年——大膽にもこの不自然な方法に對して、

……元來文章といふものは人の或種の思想感情を表現したものである。だから文章はどんなに長篇のものであつても、その全體でなければ意味をなさない筈である。時としては一部分づゝ明らかにして行くといふやうな方法も教材の性質によつては決して悪いこととは思ふが、しかし分けないうで取扱ふのが本體でなければならぬ。よし分けて取扱ふにしても、いつも思想や感情の全體に觸れさせるといふ考へで取扱はなければならぬ。

ところが従來一般に行はれてゐる教材の取扱法を見ると、先づ校長がこの教材の頁數が多いからこれだけの時間を配當しよう、この教材は他の教材よりもやゝ

困難であるから、これくらゐの時間を割りあて、おかうといふやうな考へから時間を細目の上に配當する。すると教授者はその配當された時間を更に叮嚀に時間數に等分して各時間の分量を定め、しかして後始めて案を立てるといふのが最も一般的の通則のやうに見做されてゐる。如何にもかくすることが、一時間の教授としては纏まつた仕事が出来て手際よく進んだやうに思はれるに相違ないが實際においては、それが非常に不經濟で、しかも意味のない仕事を行つてゐることになるのである。折角長篇大作に接せしめたいといふ考へから加へられた教材も、かくの如くぶつ／＼に切り分けられては、毎時間の分量が何時もきちんと極つて、分量そのものから陶冶を受けることが出来ないことになる。讀書力の方面からいふと、場合によつては長篇のものを一息に讀破させるといふことも非常に大切なことである。殊に讀本を調べて見ると、全篇を通讀しなければ意味をとることの出来ない教材が頗る多い。ところが全篇を區分しないで取扱ふことになる。最初の時間においては、兒童によつては部分々々の文字や語句などについて精確な解釋の出来ないものも出来るにちがひないが、それでも全篇の趣旨や大意は

ほと捕捉する事が出来ると思ふ。かくして何遍もくりかへし／＼讀んで行くうちに、以前に了解しなかつた部分々々の文字や語句も漸次明瞭に了解せられるに至るものである。私は何時も圖畫の教授法が國語の教授法と類似してゐることを面白く感じてゐる。圖畫の教授は主として先づ物體の輪廓を看取し、物體特有の特徴を捕捉させることに力を用ひ、かくて次第に内部の精細な部分に及ぼすといった形で教授が行はれてゐるやうであるが、頗る要領を得た教授法であると思ふ。……小著『讀方教授法要義』

の如き一石を投じた。むろん今日のセンテンス・メソッドの如き徹底した考へがあつてのことではないが、在來の分節法の不自然なのにあきたらず、何とかして新生面を踏みひらかうとした努力と苦悶のさまが想像されるであらう。

センテンス・メソッドの提唱 現在のセンテンス・メソッドはいふところの文章自體に出發したもので、ヴァントが文は総合的で、しかも分解的な過程であり、同時的繼續的、全一だといった思想などがその母胎をなしてゐる。我が國においていちばや

、この説を唱導し、これを我が國語教育界に移植したのは實に東京高師の垣内松三氏であつた。氏は大正十一年、その著『國語の力』に、

……先づ讀方の心理の研究を一瞥する。讀方の教育は各國に於てそれ／＼長い歴史がある。これを分ちて三とすることが出来る。元來讀方の心理的過程に於ては先づ第一には文字を覚えねばならぬ。それに伴うて文字の訓方即ち發音の仕方を習はねばならぬ。その次に言語の結合に對する注意が現はれるのである。この心理的過程はやがて讀方の歴史であつて、今日に於てもそのどれか、特に強調された讀方が殘存して居る。併しながら現今一般に行はれて來た讀方は所謂『文自體』から出發するセンテンス・メソッドであつて、以上の全ての讀方を綜合し『文』を以て之を統率する方法である。その上から種々の工夫が行はれて居る。特に歐洲の大戦後に各國で全力を擧げて居る戦後の改造の精神は文化の全般にその影響を及ぼして居るのであるが、讀方教授に就いての考へも、その一般の大勢から影響せられて居る。しかし各國に於てはその國勢が異なり、其改造の實際に於てもそれ／＼異つて居るが如く、讀方教授法も、これまで字句の精

細な分析に力を盡くしたイギリス、ドイツなどでは、文全體の上に注意せねばならぬと考へ、文自體の鑒賞に流れて居たフランスでは、文の部分である語句をこれまですりはもつと精細に學ばねばならぬと考へて居るので、兩方から歩み合つて一點に近づいて來て居る。その歸着點は同じくセンテンス・メソッドに在ると謂つてよい。今後センテンス・メソッドは他の方法に對した方法として共存するのでなく、それは直ちに最も自然な讀方練習の出發點であるから、その内面に於ていろいろの工夫が生れて來る外に方法はあり得ないと思ふのである。

我々の讀方をこの立場から反省する時に、これまで餘り訓話の方に傾き過ぎて居たことに心づくであらう。それはもとより文字を覺える困難もあり字音の複雑な性質にも因り、文體の整理されて居なかつたことにも因るので、専らこれらの學習に骨を折らねばならなかつたのであるが、それらの障礙を除くために種々の註釋や辭書やが現はれて居ても、讀方の實際に於ては依然として訓話の上に力を入れて居るので、新生面が開けて來さうにもない。それを見ると、讀方の新潮がひた／＼と寄せて來ないのは、それらの障害のみに原因するのではない。讀む心が

眠つて居るからである。讀む力が麻痺して居るからである。讀方が因襲に囚はれて居るからであるかとも見られる。もし正しい讀方の心が動くならば、これらの障碍を克服する力は却つてその内面より自然に現はれて來なければならぬとも考へられるのである。而してそれは讀方の心理又は讀方教授の研究から考へても少しづつ、センテンス・メソッドに近づいて行くより外にそれに活力を加へる方法はあり得ない。かやうにいふのは學說の上から考へた思ひつきでない。長い教授の經驗の上から明言することもできる。それよりも國民の精神を浪費し浪費させる悲みの上から祈の心に似た心を以てかくいふことを少しも疚しく感じない。……と述べたのがその濫觴といつてもいい。氏はいふ、解剖の前に直下に會得したものは文の綜合的同時的なる統一體であるが、それは通讀作用の第一の終點であり解剖の後に來る歸結は第二の終點である。二つの意味に於ける終點の間に解剖を連接して考へる時にセンテンス・メソッドの立場が明かになる……と、

蓋し自我の一面的觀察や獨斷的解釋を基にして教育を考へる從來の傾向に對

して、自我の全體觀の上に教育問題を解決しようとする生命主義的教育思潮に立脚したもので、その根柢を人間生活の全幅に基く生命に求めようとするデルタイ一派の哲學に淵源するのはいふまでもない。そのいはゆる體認體驗の作用は、現象學派の哲學によつて精鍊されて、遂にこのメソッドとなつて實際教育の上に姿をあらはすに至つたものと見なければならぬ。——垣内氏はいふ、歐米でセンテンス・メソッドが、文字的發聲學的、聲音學的、單語的讀方を後へにして、一般に認められたのは、一八八五年から一八九〇年（明治二十三年）の間であつて、それから後、今日に至るまで、その立場から、それまで經驗した方法論の全てを調攝した讀方教授法の研究が深化されて居る。ちやうどさうした光景が今や我々の眼の前にはつきりと見えて來た、……と、——

エルチエ式の缺點 在來の讀方は主としてエルチエ式によつたものであるがこれは語句を本位とする方法であるから、ヒューイーがいふソード・メソッドの發展したものとついでいふ。

エルチェ式は先づ文字の讀方から始め、次いで語句の解釋に移り、更に文法や修辭などの取扱を終ることによつて一文の内容が明確に把握されると考へるのである。この方法は一見論理的に組織立てられてゐるやうであるが、實際は著るしく自然に遠ざかつた極めて不合理なものといはなければならぬ。如何となれば第一この方法の根柢には訓詁的意義が過當に尊重されてゐるといふことである。即ち文字や語句の訓詁的意義を明かにしさえすれば、文意は自ら會得されると考へてゐたのである。いふまでもなく文章は有機的に組織せられ、文章自體、即ち意味の世界を現はしてゐる。したがつてその要素ともいふべき文字、語句、節、文段、文理などを仔細に吟味して行けば、遂には文意の彼岸に飛躍することが出来る。と考へたのは、その當時の思想としては無理からぬことであつたかも知れない。しかし一度我々が自然の讀書態度を反省するとき、何人も先づ不明の文字を調べ、語句を吟味して、然る後、文全體の意味を明かにしようと試みるものはあるまい。我々は何よりも先づ文全體の意味を知り、又は感じようとして文に對する。しかもその際、一字や二字の讀めない文字や意味の分らぬ語句があつても、多くはそれ

を默殺類推するを常とする。いはゆる直下直悟、眼光紙背に徹するの境地こそ、最も自然にかなつた態度でもあり、眞の讀書の態度でもあらう。然るにそのいはゆるエルチェ式なるものは、文字語句などの形式的取扱を機械的に行ひ、最後に事實思想を把握させる。つまり個々を分析して全體を知らうとする科學者の態度で、個々の總和を全體と見る皮相的な見解に外ならない。かゝる教式の不自然であることは事新しく論ずるまでもないことであらう。いふところのセンチンス・メソッドは、この自然の作用に一致せしめて讀書の態度を馴致しようといふのである。

三

センチンス・メソッドの精神 エルチェ式の缺點は訓詁的取扱に没頭して、文意の直觀、即ち意味の世界への飛躍を敢てしなかつたところにある。エルチェ式の讀方は文字語句の解釋から出發して、煩瑣複雑、紆餘曲折の限りを極めるので、最後の目的地に到達するまでに、多くは疲勞して落伍のやむなきに至るを常例とする。し

かもその最も重しとする文字や語句の知識においても、たゞ徒らに多くの言語を知つてゐるといふだけで、生きた力を見出すことが出来ない。

いつたい文を読むといふことは、文章といふ實在を支へてゐるところの文章自體言ひ換へれば意味の世界を把握することではなければならぬ。しかし、文章自體といひ意味の世界といひも、 \sim 自己の心の中に内在的對象として志向せられたところのものであるから、所詮は自己の中に自己を見る、西田博士のいはゆる本質直観でなければならぬことになる。だから他の文を読むといふことは、自と他が對立することではなくて、その奥底に潜んでゐる自己を見出すことなのである。つまり主客融合の境地である。自他包全の心境である。そこまで行かなければ本當に讀んだものとはいへない。

文章に對する觀方や態度がかう變つて來ると、取扱の方法もまた自ら相違して來なければならぬ。センテンス・メンツドはかくして生れ出たもので、同時的繼續的なる全體である文脈々として生命ある統一體である文を無慙にも切り刻んで、全生命を顧みない行方は、斷じて承認することが出来ない……文は文自體に

よつて支へられてゐる。全體は全體として意味がある。部分は全體を構成する要素としてのみ意義がある……この主張を力強く裏付けたものは、實にデルタイやシュプランガーなどのいはゆる體験の哲學であつた。

體認の作用

フェルシュテナー 即ち體認の作用は、主として客觀的對象であ

る他のものゝ意味を見出す方法に用ひられる。體認とは、自己以外の價值的體験を、自己の體験に移してその價値を身にしめることである。この方法は決して文章の場合のみに限つたものではないが、こゝでは特に精神的所産である他人の文章に對する場合について述べることにする。

體認の方法は、自然科学者が分析的に部分的の要素を明かにすることによつて進んで全體を明かにする方法と異なり、先づ全體を明かにすることによつて部分を明かにせんとするのである。したがつて、先づその第一着手として、對象の全體的價値を豫想しなければならぬ。前にもいつたやうに、エルチェ式の缺陷は文字語句の取扱に齟齬して、文意への飛躍を試みなかつたところにあるが、しかしそ

の文意なるものも、もともと、内在的對象として志向せられたものであるから、實際の仕事からいふと、語意節意文理と手数を費してはゐるものゝ、本當は既に當初において内在的對象である意味の世界といふものゝ存在を約束してゐる筈である。でないとうまく合致するわけがない。この點がフェルシュテューエンにおいて、全體的價値の豫想を第一着手とする所以で、センチンス・メソッドに哲學的根據を附與する所以でもある。

フェルシュテューエンにおいては、先づ第一に全體的の中心價値を豫想しなければならぬ。これがいふところの文意で、文意が先づ豫想されると、次にはその部分々々の意味を豫想に結びつけて見る。節意句意語意と順序をふんで、豫想された文意に當嵌めて見る。この作用を名づけて文意の方向といふ。文意にはかゝる基本的の方向といふものがあるといふのである。

かくして豫想と一致するか否かを確かめ、一致する場合はよいが、もしも合致しないやうな場合があつたら、もう一度その中心價値をおきかへて見る。さうして各部分の意味をそのおきかへた文意に結びつけて生かして見るのである。かう

して何遍もやつて見て、何等誤りなきことを確かめ得たとき、その文のフェルシュテューエンは完成したことになるのである。

フェルシュテューエンの過程から見ると、読み方は單なる文字や事實の部分的理解から始まるものではない。むしろ讀方の手續としては、第一に文字を通して事實を知らなければならぬが、しかし、それは、文の全一的精神、即ち作者が何を物語らうとしてゐるかを知らんがため、單なる事實を目的とするものではない。これが自然科学的方法と異なるところで、部分の價値はその全體の中核である個性の意味によつて定まる、したがつて先づその中核をつかんで、これと關係せしめることによつて部分の價値關係を明かにし、以て精神全體の價値關聯の組織を明かにしようとするのである。つまり自我の全一的活動によつて他我の全一的精神を了解しようといふのである。けだし部分は全層の中にあつて始めて意義があるといふのがその根本精神であつて、それが同時にセンチンス・メソッドの中心思想でもある。

現象學的根據 センテンス・メソッドに學的根據を附與するものはフツセルを中心とする現象學派の哲學である。

現象學の根本的立場は純粹意識の中に本質を直観することである。教育とはこの本質發揮を目的とするものでなければならぬ。純粹意識とは主観と客観、我と對象とが分れない本末未分の状態における意識である。即ち現象學の分析研究せんとする對象は主観の作用のみでなく、また客観の内容そのものでもなく、両者が相即せる状態について考へるのである。しかもそれを心的現象として把握するのではなくて、その心的現象の背後にある本質そのものを把握しようとするのである。

我々の意識の本質は對象への志向性であることは前既にいつたことであるが、この志向性とは意味作用に始まるのである。意味作用とは未だ指定作用を加へないところの、いはゞ主客未分の渾沌たる或ものを指示するところの純粹經驗である。この意味作用は意識の志向的本質であつて、これが具體的な直観において、別言すれば指示する對象によつて、この意味指示が確證され、明證性を獲得するこ

とによつて充實されるのである。これがいふところの認識である。この充實化において本質直観が完成を見るのである。認識とはとりも直さず本質を直観することであるから、我々の認識においては、先づ第一次直観に出發して、次にこれが分析考察の結果充實化され、終に第二次直観、即ち對象が生命の坩堝の中に溶解し獲得されなければならない。かくして我々の學習過程は當然直観分析直観の段階を取らなければならないことになる。

この最初の直観は、まだ思惟を加へずしてものゝ實相を如實に捉へることである。それは意味作用ではあるが、まだ志向作用の真相を具體的に實現したものではない。客観的價値を志向してはるが、まだ客観的價値によつて明證性を獲得したものではない。いはば本末未分の渾沌たるもので、充實性と發展性を内含しながらも未だ實にせられない不安の状態である。したがつて、この意味作用が實にされるには、それが對象において充實化されなければならない。換言すれば指示された對象が我々の意識の系列の中にその完き位置を獲得しなければならぬ。これを文の場合についていふならば、初め漠然として渾沌の状態にある全體觀が、如何

にして明るさと確かさを増して来るかといふに、それは対象である文を分析して研究するからである。即ち或は文字語句の研究が行はれ、或は節意文脈の考察が行はれる。かくして、そのおの／＼をして、それ／＼適當なる位置における有機的な働きを十分ならしめることによつて結果されるといふのである。

この充實化作用は普通にいふ分析の段階で、初めとかく主観的であつたものがこゝに至つて漸次に客観性を増して来る。したがつて、この場合意識の流れは一時停滞を來し、専ら思惟の活動に委し、その態度もまた究明的であり、考察的であるのはいふまでもない。蓋しいふところの現象學的エポケー（判断中止）で、自然的態度を排除して、端的に意識の本質だけに觀察の眼を向けようといふのである。フツセルはこれを現象學的還元と名づけ、かゝる態度を現象學的態度と稱してゐる。

現象學的態度とは、一切の理論を豫想せず、それらにエポケー（判断中止）を加へ純粹無假定の立場に立つて意識そのもの、本質を本質直観乃至反省的内的直観によつて把握せんとする、いはゞ超論理的超心理的な即ち先驗的な本質記述的態度である。

度である。かくして残された意識即ち現象學的殘餘は、最早事實的な物理的存在や、單なる事實としての心的過程ではあり得ない。又單なる論理的概念や限界概念乃至規範概念といったものでもない。それはすべての超越體から純化された、しかも個々の心的意識の實質の本質である意識、別言すれば、全的具體性において把握された先驗的純粹意識である。

四

現象學的學習過程 現象學的立場において、讀方は精神科學的教材を主とするのであるから、その學習もまた精神科學的方法によるを至當とする。左にこの見地による學習過程の試案ともいふべきものをあげて見よう。

一 第一次直観

—— 與へられたる対象即ち文をあるがまゝに見ること……したがつてその態度は主客對立に始まり、漸次に主客融合の絶對境へと進展する——

——この最初の直観は、まだ思惟を加へずして、ものゝ實相を如實に捉へることとてそれは意味作用ではあるが、まだ志向作用の真相を具體的に實現したものではない——

- 1 題意の豫想
- 2 全文の通讀
- 3 文意の直観
- 4 價値の感得
- 5 讀後の印象
- 6 感想の發表——口頭又は記帳等、等、等、

——第一次直観によつて得たる文意は、作者の生命に對する直覺的な大體の豫想であつて、これがやがて次の分析の段階において充實化され、更に發展して第二次直観に入り、眞に血となり肉となつて、いふところの價値體驗の世界

を顯現する。だから、こゝでいふ全體的なものは、一つの渾沌の状態にあるものでその朦朧不完全なるはいふまでもない。——

——かく始めから最後の到達點に對する想定をかゝげることによつて、個々の歩みに如實の意味が生じて來る——

二分 析

——檢證的研究の段階である。第一次直観によつて得たる結果をたしかめ、更に擴大し更に深化して行く、いふところの充實化作用である。——

——充實化とは對象の本質を把握することである。この立場において我々は當然現象學的方法を用ひなければならぬことになる——

——この際、若しも最初の豫想が齟齬したり矛盾したりして破れた場合には、更に繰返して省察を加へることによつて新に豫想を建直さなければならぬ……普通にいふ見直し聞直すのである。かくして漸次作者の生命層は鮮明にせられ、その意圖するところも的確に把握されるのである。——

1 自然的態度の排除

——偶然的個別的なるものを排除して、端的に意識の本質だけに着眼させる。いはゆる現象學的還元である。……かゝる態度をとることによつて、我々はじめて明確なる現象學的領域に直面する事が出来る——

——自然的態度の排除は、すべての存在を意識の中に還元するための準備である。——

(1) 文字語句の理解

(2) 語意・句意・節意の吟味

(3) 不明事項の究明

(4) 文理文段の研究

(5) 構想乃至表現の研究

(6) 思想關係の吟味

(7) 語法的文法的取扱
等、等、等、

——エルチエ式分解の弊に陥つてはならない。……個々を通じて全の相を觀ること、即ち全を孕んだ個の分析的研究である。——

——したがつて、こゝでは、意識の流れは一時停滯を來し、主として思惟作用の活動に委するはいふまでもない。——

2 超越的態度の排除

——自然的態度を排除して得たるものは超越的な對象であつて、まだ十分に内在化したものとはいへない。したがつて全き意味において充實化作用の目的を達するためには、更に超越的な態度を排除することによつて二重の還元を経なければならぬ。——

——かくして文そのものゝ意味を自己の生命の坩堝の中に熔かし込むこと

によつて漸次作者の生命層は鮮明にせられ魂の純動を的確に把握せしめる
ことが出来る。――

――かくて個々の歩みは全體によつて意味づけられることになる。――

(1) 内 省

――あらはされた意味が我が意識の全系列中に占める位置について内省し
認識することによつて明證性は附與せられる。かく超越的立場をはなれ、靜
かに自己を凝視することによつて自己の創造的發展が可能となる。――

――今まで享受的なものが自己的なものとなり、客觀的なものが主觀的なも
のとなる。――

――内省の世界で直觀によつて得たる自己の心の状態に明確な體系統一を
求めようとするのである。したがつてその態度は究明的であり考察的であ
るのはいふまでもない。――

(イ) 内容の深究

(ロ) 事實の吟味

(ハ) 表現の巧拙

(ニ) 表現の適否

(ホ) 語法文法的考察

等、等、等、

(2) 自 證

――内省に次ぐものは自證である。自證とは主觀的なものが客觀的な
ものに保證と承認を求めようとするのである。蓋し内省によつて主觀化さ
れたものを客觀的な表現に證示することによつて、ともすれば陥り易き獨
斷の弊を防止して、自他包全、主客融合の天地を開拓しようといふのである。

――別言すれば作者の心境の中に自己を見出し、自己の心境の中に作者を見
出すのである。かくして作者の心境の全部を展開し得て、その眞生命に交流

し、より高次の直観へと止揚して行く。いはゆる辨證法的發展である。――

(イ) 表現内容の考察玩味

(ロ) 真情の洞察味到

(ハ) 表現の妙味識別

(ニ) 措辭辭樣韻律

(ホ) その他修辭的研究

等、等、等、

三 第二次直観

――生命的把捉の段階である。……意味の十全化、即ち體験的認識の世界であり、價值體験の世界である。別言すれば生活化された状態である。――

1 文意の確認

2 鑑賞味讀

3 感想の發表――口頭又は記帳

4 學習事項の整理

5 應用練習

6 創作的表現

――改作・繪畫・表出・作詩・作曲・劇化その他――
等、等、等、

第一次直観

センテンス・メソッドにおいては、文意の直観、即ち文章自體の直下の會得を以て出發する。普通我々の讀書は多くこれで終るを常とするが、幼稚な子供においては、さういふわけに行かない。――むろん、我々とても、精讀を必要とする場合は分析直観の順序を辿るを普通とするが――それで先づ對象たる文の全意を直観しなければならぬ。この場合、個々の事實や文字や語句などを見ようとはせず、全體として何を表現してゐるかを見ようとする。文の表面ではなくて、その奥に潜む作者の意圖を見極めようとする。これがいはゆる第一次直観で、い

ふところの直下の會得なのである。この際の心境は恰も明鏡と明鏡とが對立したやうに、その間思惟作用によるのではなく、何等自己の作爲を加へずに直に對象の心を心に受取るのである。

しかしながら、文意の直観はこれで完全とはいへない。——一回の通讀で満足される場合もないではないが——第一次直観によつて得たものは、嚴密な意味における豫想乃至假定に過ぎない。かうだといふ確認ではなくて、かうだらうといふ推測に外ならない。だからこの豫想は更に分析され檢證され自證されることによつて否定されることもあらうし、また肯定されることもあらう。これが體認の作用即ちフェルシュテューエンにおいて、思惟又は分析を中間に配する所以で、第一次直観において得たる結果をたしかめようといふのである。垣内教授が……視覚から神經に連る心理的過程は、音讀から導かるゝ心理的過程とはもとより同一の作用ではない。これを心理的に分析すれば、ヴントが文に對する時の心の動き方の初めを『暗室である畫に向つて居る時、突然一方から光がさしこんだら、先づ初めに畫の全體の形が現はれて次第に部分々々が明かに見えて來るやうに、先

づ文の形が見えて來る。』といつたのは、第一回の視讀において著眼しなければならぬ要點である。少くともこれを捉へんとする意志によりて精神が統一せられて文字を凝視する時にこの心の据ゑ方から讀方が正しい方向に導かるゝといふことができる……もしかゝる讀方に依つて鍛鍊せられた讀む力であれば、視讀においても讀まうとする文に對して未知の文字や言語に躓きがちであることなしに、先づ文全體を洞察して、それを心の面前に引き据ゑた上で、徐々に解らぬ言語の解釋を辭書に求めて、言語の意味を考へ、文の眞意を捉へることを難しとしないであらう……といつてゐられるのは、この第一次直観の場合をいつたものであらう。

この段における主なる仕事は、文意の把捉で、通讀はその手段である。いふところの文意は、文章自體碎いていへば文の生命ともいふべきもので、文をしてあらしめた最初のもの、即ち形象以前の主客未分の状態を意味してゐる。文は文意が形をなして展開したものである。したがつて、普通に文章の内容を要約した意味に用ひられる大意と混同してはならない。

通讀は讀みの最初の作業であると共に、また最後の作業でもある。むろんこゝでいふ通讀は、在來のエルチェ式に見るやうな、徒らに言語文字を音聲に還元して通り進むといった器械的のものではない。全心を一點に集注してひたぶるに意味の世界への驀進飛躍をこれ念とするのである。したがつて、一字や二字の讀めない文字や不明の語句などは問題ではない。たゞ文意へ文意へと、全的に傾倒するところに第一次直觀における通讀の意義がある。

分析 第一次直觀に次ぐ分析——思惟又は考察——はいふところの充實化作用であつて、第一次直觀によつて把握された意味作用が具體化され内在化されることによつて、十全なる本質を發揮することを意味する。したがつて、この段の主要なる任務は、先づ自然的態度を排除し、更に超越的態度を排除することによつて二重の還元を行ふことで、これを讀み方の仕事の上からいふと、文字語句の理解内容の深究事實の吟味、その他、語意句意節意文段などの主として分解作用による分析的研究を始めとし、内省自證の綜合作用をも包含して、讀み方における主要な

位置を占めてゐる。

思ふに、第一次直觀は、それがよし全心的傾倒による全力的の作業であるとしても、文の全圓を残りなく把握し盡すことは出来がたい。いはゞ閃電一過、ばつと眼を射たそれと同様、印象深い或ものが力強く腦底に刻せられるといふに過ぎない。それでこの段では、その印象づけられた或ものを更に掘り下げおしひろげて、生命の全圓意味の世界の顯現へと邁進すべきはいふまでもなく、なほその一字一句を細密に吟味し考察することによつて、——この間に二重の還元が行はれて——それが果して間違なきか否かを確かめ、充實化作用の目的とするところを全ふしなけばならない。この第一次直觀によつて得たるものに確認——自證——を與へるといふことがこの段の重要な任務で、第一次直觀はかゝる確認を得、明證性を附與されることによつて充實化作用の目的を完了することが出来るのである。けだし、認識の極致は十全化であつて、直接的自證の境地である。かくてあるものが認識されたといふことは、それについて志向せられたものが與へられたものと一致したことであり、意味指示が直觀において充實化されたことの謂であることを思

へば、この段階が如何に重大な意義を有するか、忖度されるであらう。

たゞこゝに注意しなければならぬことは、やゝもすれば陥り易き分析の弊で、分析が分析に墮し、徒らに文の全意とはなれて單獨に取扱はれがちなことである。むろん語意といへば語の形において、句意といへば句の形においてするのは當然であらうが、それが全然孤立的に取扱はれ、継続的の全一である文の精神に遠かるやうなことがあつたら、こゝにもエルチェ式同様の無意味な仕事を繰返すが如き愚を敢てすることが無いとはいへまい。現象學派の哲學に基礎をおいたセンチメンソッドでは、一語の中にも全體の心を宿して読み、一字を吟味するにも前後を考慮して全文の意味への交渉を忘れない。かくして、文をしかと面前に引き据ゑて、最後まで離さないところにセンチメンソッドの特色がある。

第二次直観 この段は文意確認の段階で、價值體驗の世界、即ち眞の了解、眞の悟得の心境を意味してゐる。

前にもいつたやうに、センチメンソッドは、文章自體即ち文そのものから出發

するものであつて、すべての讀方を綜合して文を以て統率する方法に外ならない。したがつて直観に始まり直観に終るともいへれば、讀みを以て始め、讀を以て終るともいへよう。

讀みの極致は直観にある。直悟といひ默會といひ、將又直下の會得といふ、何れも讀みの極致をいつたもので、共鳴・同感・陶醉・享樂はその結果なのである。古人が『讀書百遍意自通』といつたのも、芭蕉が『舌頭に千轉して』豁然と悟るといつたのも、その精神とするところはセンチメンソッドと合致してゐるのも不思議である。けだし、最初の讀みと最後の讀み、その中間にある、いはゆる『百遍すること』『千轉すること』は充實化作用でなくて何であらう。一にも讀み、二にも讀み、讀みで終始するのが本體で、その他の仕事は要するにその變形に過ぎない。かくしてその最初の讀みと最後の讀みとを比較して見ると、おのづからそこに深淺廣狹の差あるはいふまでもない。始め淺かつたものが後に深く、始め稀薄であつたものが後に濃厚に、そこには成長があり——文意の——練成があり發展がある。

第二次直観は第一次直観の發展したもので、これを讀み方學習の上からいふと、

が後に濃厚に、そこには成長があり——文意の——練成があり發展がある。
第二次直観は第一次直観の發展したもので、これを讀み方學習の上からいふと、文章自體と讀みの主觀とが渾融して一體となることを意味し、文意の確認、生命的把捉、鑑賞味讀應用練習、改作劇化、その他の創作的表現など、主として自己の生命をみだし、讀みの内容と力とを鍛鍊するに足るべきものを以てしてゐる。

學有所得。 必自讀書入。 讀書千熟萬熟時。 一言一句之理。
自然與心融會爲一。 斯有所得矣。

——薛文清——

第五 プロブレム・メソッド

—

プロブレム・メソッド “Problem method” は問題法又は問題による方式の意で、主として自然科学的記述の文を取扱ふ場合に適用される。

プロブレム・メソッドも廣い意味からいふとセンテンス・メソッドの中に含まれるかも知れないが、しかし全然立場を異にし、且つ適用の範圍も異なつてゐるのだから、これを別個のものとして對立させて考へる方が妥當であらうと思ふ。即ち前にいつたセンテンス・メソッドは、おもに文化科学的記述の文に適用し、こゝにいふプロブレム・メソッドは自然科学的記述の文に適用される。

科学的なるもの 科學の方法は、分析、解剖、推理、演繹と、外部から物を抽象的に見て行く。この點藝術とは正反對の位置にあるといへよう。即ち

科學——抽象的——普遍的——分析的
藝術——具體的——特殊的——綜合的

である。藝術は物を具體的な全一なものとして見るが、科學は理性に訴へ且つ普遍的分析的な見方をする。

科學の知識は確實で一般的で組織的である。だから我々の知識慾はそこに大なる満足を見出すのである。我々はこれによつて人生と世界とを確實に知ることが出来る。知識慾が満足されると同時に、我々は科學によつて應用上少からぬ効果を受けるのである。このことは現代文明人の生活が、どれだけ科學の恩恵を受けてゐるかを反省して見れば直ちに頷かれることである。

しかし科學の知識は確實ではあるが、まだ本當に全體的不是ではない。だから全體の事物にあてはまらないのである。科學の知識は一般的だとはいつたが、その一般も或程度までの一般である。例へていへば動物學の知識は動物といふ自然界の一部分にだけあてはまるが、それが直ちに自然界の全般にはあてはまらない。化學の知識は元素の性質やその化合の法則を説明することは出来るが、力の法則

や音の法則にはあてはまらない。要するに科學は自然界及び人生社會の一角づつを取つて研究するもので、個々の科學は自分自身の範圍においては一般的であるが、その領域を越すと更に別な科學の恩恵によらなければならぬ。この點藝術の綜合的で具體的で特殊なものと全然反對の立場にあるといへよう。

ペルグソンはいふ、我々に與へられた直接の具體的實在は流轉的である、發展的である、瞬時も止むことがない。つまり生きた物である。かゝる實在の眞面目は到底外からこれを窺ふことはできない。唯その物になつて内よりこれを知ることが出来るのである。直觀といふのは全然自己の立脚地を棄て、利害得失の關係を一掃し、物自身になつて見るのである。然るにいはゆる知識なるものは、我々が自己の利益を中心として、この方面から物を見たのである。即ち利害關係から物を見るのである。それで概念といふのは、我々が物に對して働く一定の型の如きものである。我々の行爲及び態度の種々あるだけ、種々の概念的傾向があるのである。種々の概念は皆活動せる實在の一面を捕へてこれを固定したものに過ぎない……と蓋し前者はいふところの藝術的態度で、後者は科學的態度である。

藝術的態度は直觀の結果陶醉享樂法悦の心境を目的とするが、科學的態度は理知を中心としてひたすらに眞を求めんとする。したがつて藝術的の文は幾度讀んでもあきないが、科學的の文は一度内容を理解すれば、その文に對してはもう何等の興味をも覺えない。この點においても兩者は全然その立場を異にするものといはなければならぬ。

尤も最近においては、兩者を接近せしめ、その峻別の程度を一層減少せしめんとする傾向もないではないが、それとて兩者を全く同一視するわけではない。科學は事實を取扱ふといつても、主として抽象的な概念による作用であり、藝術は事實を事實のまゝに、飽くまで具體的な直觀によつて進まんとする努力である。したがつて、他の點において兩者はどれほど合致してゐようとも、少くともこの點において互に異なるものであることは争はれない。

科學的文 普通に直觀といはれるものは、主觀と客觀とが一つに結合した全體的なものを意味してゐる。全體的なものとは一つの渾沌の状態にあるもので、そ

こから概念が把握される場合には、理論的な悟性の世界が考へられる。これは『理論的なもの』の世界であるが、これに對して『美的なもの』が把握されるならば、それは藝術の分野が展開される。又それが意志の形をとるならば、それは倫理的な分野が考へられるだらう。この渾沌としての全體が概念として把握されるためには、主觀が客觀において考へられるといふ判断の形をとらなければならぬ。一般的な客觀において特殊な主觀が考へられるといふことによつて概念が把握される。言ひ換へるならば、それは知的直觀において可能となる思索の世界であるといふことが出来るであらう。

科學的文は主として知的直觀によるものを意味し、國語讀本卷七の『海ノ生物』卷八の『看板』、卷九の『物ノ價』の如き説明を主としたものや、卷十の『平和なる村』卷十一の『自治の精神』、卷十二の『國旗』の如き評論を主としたものなど、おもに讀者に合理的理解を要求する文を指してゐる。これに反して、卷六の『萬じゆの姫』、卷七の『マリーのきてん』、卷八の『廣瀬中佐』、卷九の『若葉の山路』、卷十の『霧』、卷十一の『ふか』、卷十二の『月光の曲』などの藝術的文は、理論的なものに對して

非理論的なものといふことが出来る。外山卯三郎氏によれば、非理論的な意味といふのは、意味がないといふことではなくて、理論的でない意味があるといふことでなければならぬ。理論的でない意味とは、それは『考へられる意味』ではなくて『感じられる意味』でなければならぬ。考へられる意味は明かに理論的合理的なものではなければならぬ。しかし考へられる意味でない感じられる意味はどこまでも理論的合理的ではないものである。Nonsenseといふことは明かに考へられる意味をもつてゐる。しかしNonsenseといふことは考へられる意味ではないが、それはナンセンス(無意味)ではあり得ない。それは考へられる意味でない意味即ち感じる意味がある。しかしNonsenseといふことは明かにナンセンスであるだらう。何故といふならば、そこには感じられる意味もあり得ないからである。こゝにいふ理論的でない意味には0は現れない。何故といふならば、それは如何程虚数であつても、それは考へられない意味を持つてゐる。しかし0は感じられる意味ではなくて、一つの考へられる意味の否定であるに過ぎない。感じられる意味、即ち理論的でない意味とは、考へられる意味の否定ではない。それは意

味される対象又はその意味が現はれる領域を異にするものでなければならぬ。こゝに藝術的文——科學的文も——といはれるものゝ獨自な意味が考へられる。

二

了解の方法　科學的文の取扱は了解の方法によるを妥當とする。即ち第一次の讀みに始まり、文意の確認・中心價値の決定に終る。これを過程的に示すと、次の如きものであらう。

了解の方法は、デルタイ一派の生命派の哲學でいふフェルシユテーエン即ち體認の作用に基いたもので、デルタイは文章・繪畫・彫刻の如く人の精神作用によつて生れた、いはゆる文化財を理會する場合を特に解釋と稱してゐるが、この語は我が國在來の解釋の意と混同され易いところからして、一般に了解の語を用ひることになつてゐる。

(全體的)

—— 文意の直観 —— 中心價値の想定 ——

- 1 題意の豫想
- 2 全文の通讀
- 3 概意の把握
- 4 中心價値の想定
等、等、等、

反 省

(分析的)

—— 前段において得たる意味を充實せしめるために、客觀的價値を具體化して意識の對象たらしめ、更に反省作用を加へることによつて明證性を附與しなればならない。 ——

確 認

(全體的)

—— 文意の確認 —— 中心價値の決定 ——

- 1 全文の通讀
- 2 文意の確認

- 3 中心價値の決定
 - 4 學習事項の整理
 - 5 應用練習
- 等、等、等

科學的文の取扱も藝術的文の取扱と同じく、讀みに始まり讀みに終るを通則とする。しかしてこの場合の讀みが全體を對象とすべきはいふまでもないことで、この意味において科學的文もまたセンテンス・メソッドの適用範圍内にあることは論を要しないところであらう。たゞ異なるところは、彼が生命の躍動を直觀し得るのに對して、これはその文があらはす事實乃至思想を了解し得れば足れりとする。したがつて、その最初の出發點においても、彼は文章全體から迫つて來る或るものを意識するのに對して、これはたゞその概意概觀の漠然として眼前に展開するのみである。

了解の方法による科學的文の取扱は、先づ題目による題意の豫想に始まり、續い

て通讀による全文の概意、中心價値の想定に進み、次いで反省(分析)の段に入り、不明の個所を確かめ、適否を考察して、前段において得たる意味を充實化することによつて完全性への進展を企圖する。かくして、最後の文意の確認、中心價値の決定に至つて完了するのである。

この過程は、學的根據が十分であるばかりでなく、頗る自然であり、且つ至つて常識的でもある。それを疑ふ人は、何よりも先づ我々が毎日の新聞や雑誌を讀む場合を反省して見るがよい。我々は第一に見出即ち題目を見る。さうして大體の輪廓を豫想して、目ぼしいものだけを擇抜いて讀むであらう。新聞はこの點に最善の努力を拂つてゐるが——見出即ち題目のつけ方は新聞技術の最大なるものである——一般の讀物、特に讀本の題目はこの點に遺憾が多い。しかし、題目によつて大體の豫想を下すことは、一般の讀物も新聞とかはりはない。

かくして、我々は先づ題目によつて大體の豫想を立てるのであるが、この豫想は極めて漠然たるもので、たゞわづかにその輪廓を知り、ある期待心と努力心を喚起するに止る。そこで我々は直ちに全文の通讀に移るのであるが、この場合、そこに

何が現はされてゐるかといふことを捜ることが全體であつて、他の何ものにも注意が向かない。したがつて一字や二字の讀めない文字や不明の語句などがあつても遠慮なく看過して顧みないのを常とする。かくしてその全意を掴むことが出来れば、それで満足するのが普通であるが、何か特に必要があり興味をひくことがある場合には、更に繰返して讀み、不明の個所を確かめたり、讀めない文字や語句などを調べたりして、一層確實に文意を掴み、讀みの彼岸を極めようとする。かくして全體の過程の上から眺めると、二回の讀みを繰返すことになるのであるが、實際は螺旋の廻轉するが如く、繰返し／＼讀むことによつて、一回は一回と更に廣く深く進むべきはいふまでもない。蓋し過程の上からいふ第一回の讀みは、概意の把握、中心價値の想定に相當し、第二回の讀みは分析、反省の結果による文意の確認、中心價値の決定に相當する。

プロブレム・メソッド 文をなす場合の態度によつて、文を類別して情感を中心としたものと、理知を中心としたものゝ二つとするのは正しい。前のは藝術的態度

で、後のは科學的態度である。藝術的態度からは藝術的文が生れ、科學的態度からは科學的文が生れる。この二つは最も根本的なもので、兩者を對立させて考へるとき、方法論的立場も極めて明快に解決されるのである。

藝術的文は情感を中心とし、主觀の意味づけが行はれてゐるから、主として直觀により意味への飛躍を行はなければならない。したがつて前にいつた體認の方法によるセンテンス・メソッドは、おもに藝術的態度になる文にのみ適用されるものと心得なければならぬ。これに反して科學的文は理知を中心とし、知解を目的とするのであるから、藝術的態度になる文に對する場合のやうに深入する必要はない。たゞその内容を理解し、知的満足を得ればそれで十分である。この兩者は明確に區別されるべきもので、いふところのプロブレム・メソッドは、前にあげた了解の過程と共に、後者の目的を達するにふさはしき方法の一つである。

プロブレム・メソッドの適用 プロブレム・メソッドもセンテンス・メソッドと同じく、文意の直觀、全意の把握に出發する。たゞ異なるところは、その分析の段階にお

いて、彼は體認のための充實化を目的とするに對して、これは先づ内容を吟味して問題を構成し、その問題の解決を文に仰がんとする。彼はあくまで直観により意味への飛躍をこれ念とするが、これはほとんど理知によつて終始し認識を以て足れりとする。それはあたかも數學や物理化學において、與へられた問題を證明する場合と相似てゐる。左にその具體例を擧げて見よう。

例の一

竹の子 (國語卷三)

この 二三日 の 雨 で、竹の子 が こんなに 出ました。むぐらもち でも とほつた やう に、土 が ところどころ もち上つて みます。そこ から 竹の子 が 出る の です。この あひだ かきね の そば へ 出た の は、もう 私 のせい より 高く なりました。かう のびて は とも たべられませんか。石がき の 下 へ 出た の は、かは が おちはじめで、竹になりかかつて みます。あれ は いまに さを竹 に でも

なる の でせう。又 あそこ ここ に わら を むすびつけて ある の は、ほりとらない するし で、のぼして おや竹 に する の ださう です。むかふ の 方 に、二本 ならんで ある ほそい 竹の子 は、いまに 竹 に なつたら、おちいさん に、あれ で竹うま を こしらへて いただく つもり です。

いくらか藝術的色彩もないではないが、だいたい知解を主とした科學的の文と見てよからう。

先づ通讀させて、それから疑問の形で問題を構成させる。

もんだい

- 1 竹の子が一どにたくさん出たわけ、
- 2 竹の子が出るとき、土がどうなるか。
- 3 かきねのそばへ出たのが、今どれくらゐるのびてゐるか。
- 4 のびた竹の子はなぜたべられないか。

- 5 竹になりかゝつてゐる竹の子は、かはがどうなつてゐるか。
- 6 なぜかはがおちるのだらう。
- 7 そこゝにわらがむすびつけてあるのはなぜだらう。
- 8 竹はどんなやくにたつたらう。
- 9 竹でこしらへたもの。
- 10 竹うまのこしらへかた。

かうして思ひ／＼に問題を構成させて、成べく自力でそれを解決させるやうに仕向けるのであるが、時には疑問を提出させて、お互に解決させることもあれば、問題を整理して順次にそれを解決しつゝ進んで行くこともある。

こたへ

- 1 二三日雨がつゞいてふつたから。
- 2 もぐらもちでもとほつたやうに、土がところどころもち上つてゐる。

- 3 もうこのこどものせいより高くなつてゐる。
- 4 のびるとかたくなるから。
- 5 下からだん／＼とれておちてゐる。
- 6 竹がかたくなつて、かはがいらなくなるから。
- 7 ほりとらないし、のぼしておや竹にするため。
- 8 竹の子のうちはたべられるし、竹になると、さを竹にしたり、竹うまをこしらへたり、いろいろなきいくものをこしらへたりする。
- 9 竹かご、竹ぼうき、竹さを、つりさを、ふえ竹うま、水でつばう、ふでのじく、竹すだれ、竹ざいく、竹がき。
- 10 二本の竹のみきに、のれるやうに足かけの木をとりつけてこしらへる。

この際、『雨』『高』『石』『方』などの文字や、『もぐらもち』『かきね』『石がき』『を竹』『しるし』『おや竹』『つもり』などの語句の意味を確實に會得させる。

馬はたいそう元氣のよい動物で、生れた日からすぐ歩く。走ることがはやくて、乗用としてはこれにまさる動物がない。又力が強いので、荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。戦争の時には乗用としても、輸送用としても、きはめて大切なものである。武人は昔から之を愛養して、いざといふ時には、それに乗つて出かけた。畠山重忠はひよどりごえのさか落しに、馬をしようつて下りたといふし、近くは乃木大将も、馬は煉瓦造の小屋に入れて置かれたのである。馬の大きさは前足の所ではかる。八寸・九寸などといふのは、四尺八寸・四尺九寸などのことで、五尺あると、十寸といふ。それ以上は十寸一寸・十寸二寸などといふ。

我が國の馬は西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐたが、近年外國から種馬を輸入したので、大いに改良されて、いたる所に良馬を見るやうになつた。

純然たる説明文といつていゝと思ふが、新出文字も多いし、文もひきしまつて無

駄がないので、讀解には可なり骨が折れよう。こんな教材はやはりプロブレム・メソッドにより、兒童に先づ問題を構成させ、それを整理しながら次のやうな表解を試みさせるのも一法であらう。

たいそう元氣がよい……生れた日からすぐ歩く。

乗用として……走ることがはやいから、

ふだん 荷物をつけたり、荷車をひかせたり、田や畠の耕作に使つたりする。力が強いから、

戦争の時

乗用 武人は昔から馬を愛養した
 輸送用 畠山重忠 (馬をしようつて下りた)
 乃木大将 (煉瓦造の小屋に入れて置かれた)

馬の高さ

はかりかた……前足の所ではかる。
よびかた……八寸・九寸・十寸・十寸一寸・十寸二寸

日本の馬

西洋諸國の馬にくらべると、せいも低く、體格もおとつてゐる。近年外國から種馬を輸入したので、大に改良された。

以上はプロブレム・メソッドの具體例であるが、なほこの外に相互學習や討論式の學習法などもある。これらは何れもこの教式の變形したものと見るを至當とする。尤も相互學習や討論式の學習法などですべてをおし通さうとする人もないではないが、本來立場を異にする各種の教材を一つの教式でおし通し得るものであるかどうか。殊に文化科學的教材即ち藝術的態度になつた文に對して、認識をもとにしたプロブレム・メソッドを適用することの根本的錯誤であることは識者をまつまでもないことであらう。

要するにプロブレム・メソッド乃至その變形である學習法的諸方法は、自然科學的教材に對して始めて意義があるのであつて、そのいはゆる問題法といひ、討論式學習法といひ、文化科學的教材に對するセンテンス・メソッドの諸方法と相待つて始めて意義あることを忘れてはなるまい。

中篇 形象直觀と讀みの諸相

第一 文意の直觀

一

文意といふこと 形象の觀念を透徹せしめるには、先づ順序として文意の如何なるものかを知らなければならぬ。いふところの文意は形象以前の本末未分のものを意味し、これが實にせられ文としての體系をなして外にあらはれたものを我は名づけて文といつてゐる。この意味において、文は文意が形をなして展開したものともしへれば、文意が形象化されて外に姿をあらはしたものともしへよう。文意と似て非なるものに大意がある。大意は文章内容を要約したもので、普通にいふ梗概又は大綱の意に相當する。したがつてそこには表面的な要素的なもの

の、外に生命的の何物をも見出し得ないのはいふまでもない。

例をあげていふと、國讀卷七の巻頭にある『世界』について、

- 1 世界のことか書いてあります。
- 2 私たちが住んでゐる世界のごく大たいのことが書いてあります。
- 3 私たちが住んでゐる地球の形と海や陸のこと、それから地球上にある國のかずや我が日本のことが書いてあります。
- 4 私たちが住んでゐる世界は、形がまるいから地球といひます。その地球の表面には海と陸とがあり、海は陸よりずつと廣い。さうして海は三つの大洋に分れ、陸は六つの洲に分れてゐます。我が日本はアジャ洲の東部にあります。この地球の上には大小合せて六十餘の國がありますが、その中で我が日本やイギリスなどの五つの國を世界の五大強國といひます。

といった大意があげられる。(1)は題目そのまゝ、(2)は内容をごく大ざつばにひつつかんでいつたもの、(3)は梗概、(4)はそのやゝ詳しいもの………在來のいはゆる

大意なるものは、先づ大體こんなものであらうと思ふが、これらは何れも文を外面的にながめ、そのあるものは漠然と、やゝ進んだものも皮殻の外面を撫摩して素材の梗概を羅列したといふに過ぎない。そこには文の形骸があるばかりで、その深奥に沈潛する生きたあるものを逸してゐるのはいふまでもない。

これに反して文意は、内面的な、生命的な、いはゆる文章自體、別言すれば文をしてあらしめた最初のもの、文の心魂、生命核心などがこれに相當する。——私はかつてこれに文旨といふ言葉を當嵌めて見た——したがつて文意には文のすべてを統率する力があるが、大意はたゞその外廓を示すに過ぎない。文意は動的で生長性があるが、大意は靜的で發展性がない。前の例でいふならば、

……われらが住んでゐる世界は、形がまるくて球のやうな形をしてゐる。その表面には海と陸とがあつて海は陸よりも廣い。我が日本はアジャの東部にあつて世界の五大強國の一つに數へられてゐる。……

といふのが大意であらうが、文意はそれとは全然趣を異にしてゐる。むろん、形が

まるいから地球といふことも、地球の表面に海と陸とがあることも、海が太平洋・大西洋・印度洋に分れ、陸がアジア・ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・大洋洲に分れてゐることも、乃至は我が大日本帝國がアジアの東部にあつて、世界の五大強國の一つであることも、この文を読むことによつて知らねばならぬことには相違ないが、それよりもそれをさうさせた最初のもの、別言すれば形像以前の本末未分、主客未剖のあるものを直視しないではゐられまい。それは唯一な内在的な、價值性に富んだもので、それを見出すには文を前にして凝視する心の眼にまたなければならぬ。かくして『世界は廣く國も多いが、日本はほんとにいゝ位置を占めてゐるなア……』といった文意に到達することが出来たら、この文はびたりと据つて——作者の意圖もはつきりして——一寸の身動きも出来なくなる。形がまるいことも、海と陸とがあることも、三大洋六大洲に分れてゐることも、みんなこの一點に統一され、統率されて、生きた、全心的な、生命體を具現することが出来るのである。

くりかへしていふが、文は文意が形をなして展開したものである。文意はその

具體的の全一者、砕いていへば内面的な力ともいふべきものであらう。形像はかゝる文意がおのれを實にしたものであることを思へば、いふところの形像が何を意味するかもおぼろげながら推測に難くはないであらう。

文意の性質

文意はその性質上、知的の要素が少くて、どちらかといへば、むしろ情意的なものといつてもいい。これは感情を主とした藝術的文は無論のこと、知的科學的文においてもやはり同様なことがいへる。例へば前にあげた『世界』や『横濱』『大阪』乃至は『分業』『物ノ價』『裁判』『新聞』『法律』などの、一見ほとんど情的要素を缺いだかに見える文においても、一度その内面に徹し、作者の位置に身をおいて考へて見ると、そこに生々潑潑たる情意の躍動を意識しないではゐられまい。文の裏に流れてゐる作者の心の動き、——それがこの文をして文たらしめたもの、もので、文意はかゝるこゝろ、魂の動きに名づけた名前に外ならない。例をあげて見よう。

ツバメハトブコトガ上手ナ鳥デ、ツブテノヤウニトンド來テ、物ニツキア
タルカト思フト、カルクミヲカハシテ、矢ヨリモ早クトンド行キマス。
ガントオナジク、ワタリ鳥デ、アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコ
ロ、南ノ國カラワタツテ來マス。サウシテダン、スマシクナツテ、ガン
ガソロ、ワタツテ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス。ツバメハコ
チラニ居ル間ニ、人ノ家ニスヲ作ツテ、ヒナヲソダテマス。
ツバメハ田ヤ畠ノ作物ニツク虫ヲ取ツテタベマスカラ、人ノヤクニ立ツ
鳥デス。

誰が見てもこれは知的説明文で、編纂趣意書にも理科的教材と銘を打たれてゐる。なるほど一見それには相違ない。私は或る一派の人がいふやうに無理な意味を添へようとは思はない。しかしこれを單に知解を主とした理科的教材として、こゝに擧げられた事柄——私はこれを素材と名づけてゐる——だけを知らせて満足されるかどうか。

書いてある事柄だけを知らせるだけならば理科ですると同じやうな取扱で結

構であらう。さうして、

トブコトガ上手ナ鳥デアルコト、
ガントオナジク、ワタリ鳥デアルコト、
人ノヤクニ立ツ鳥デアルコト、

が分ればそれでいゝ筈である。かうして結局、

トブコトガ上手デ、ガントオナジク、ワタリ鳥デ、人ノヤクニ立ツ鳥デアル。

といった、いはゆる大意を掴ませれば、この文の取扱は終つたものといつていゝわけである。事實今まではこれで満足してゐたのであるが、私たちはそれで満足されるであらうか。

文を固定した事實そのものとながめ、そこに書かれてゐる事柄を知らせるだけで満足されるものとするならば、それでいゝであらう。しかし、一步ふみこんで文を本質的に見、作者の位置に身をおいて考へて見ると、そこに何か知ら、大きな或る

何ものかを逸してゐるやうな氣がしてならない。

私たちは作者をはなれて文を全然超越的に見るわけに行かない。したがつてそこに書かれてゐる事柄例へば『ツブテノヤウニトンテ來テ、矢ヨリモ早クトンデ行キマス』とか、『ガントオナジク、ソタリ鳥デ、アタ、カニナツテ、ガンガ北ノ國ヘカヘルコロ、南ノ國カラワタツテ來マス。サウシテダンノ、スバシクナツテ、ガンガンコロノワタツテ來ルコロ、南ノ國ヘカヘツテ行キマス』とかいつた、普通内容と考へられてゐることを平一面の説明と見ることが出来ない。そこには作者のいはんとするところ——説かんとするところ——の或る何ものかゞ伏在してゐるのを見逃すわけには行かない。かくしてそこに書かれてゐる事柄の一つ一つが或る意味をもち、使はれた言葉が作用を孕んで作者の意圖するところを明確に把握する。この心境を我々は名づけて文意の把握といふ。それは單なる理的なものではなくて、生々潑潑たる情意の働きであるのはいふまでもない。こゝまで行くと、『燕はこれ……』といふ大意は深化して、『燕はかはい、鳥だ』といふ文意によつて、文のすべてが統率される。第一節の『トブोटガ上手ダ』とい

ふことも、第二節の『ガントオナジク、ソタリ鳥デアル』といふことも、第三節の『人ノヤクニ立ッ鳥』といふことも、みんなこの文意の展開したもので、一語一句のすべてが、この文意に統一されてゐるといつてもいふ。かうして正しく作者の想を掴み、『燕はかはい、鳥だ』といつた文意を把握することが出来たら、この文の取扱としては、大體において徹底したものといつて差支へないであらう。

文意は固形した概念ではない。常に動き常に流れて、その意は文のすべてに滲透し、一語一句の末にまで宿つてゐる。頗る具體的な流動性に富んだものである。したがつてこれを表面的に外面から捕捉しようとしても絶対に不可能で、それはどうしても深く内面に徹し、文の奥底に動くあるものを直視するの外はない。この點において我々は現象學派の哲學に教へられるところが多い。いふところの本質直観は、文意把握の唯一の方法といつてもいふ。

現象學派の哲學によると、事實は必ず本質の中に成立し、本質は常に事實の中に存する。我々は事實の中に本質を觀、また本質なしに事實は成立し得ないが故に、本質を通じて事實を觀るのである。事實と本質とは全く範疇を異にしなからし

かも密接不離な關係にある。したがつて本質を除外しては如何にしても事實は考へられないといつてゐる。これは直ちに取つてもつて我が讀方教育を基礎付けるに足るべきもので、同時に新しき讀方の方向を示したものともしへよう。フツセルはいふ、我々が個々の事實を事實として直観し得るのは、同時に又は根本において、それ／＼の事實上の本質を直観してゐるからで、その事實の事實たる特殊な本質を直観するでなければ、それ／＼の事實をそれ／＼特殊なものとして知覺し得ない筈である。だから我々は本質直観によつて、それ／＼の本質が活けるまゝに自體そのまゝの形において、與へ、與へられてゐると、

文意が形象以前の本末未分の或るものを意味し、その把握が本質直観によつて可能であるとすれば、文意が非實有的であつて、内在性と直観性とを本性とすることもおのづから首肯されるであらう。

文意の成長 文意の把握は形式論理の移行に委すべきものではない。それはたと直観あるのみで、一にも直観、二にも直観直観に徹することによつてのみ我々は

それに直面し得べきものである。したがつてそこには、文意の生長、文意の伸展といつた重大な意義を見出さなわけには行かない。これは少くとも直観の如何なるものかを知るものゝ否定し得ないところであらう。然るに世に多く文意を説き直観を口にするものが、この事實を無視し、過重の仕事を幼稚の子供に強ひ、程度異なる讀者に自己同様の文意を強要して顧みないのは何故であらう。

私はこゝに論理の錯雜を避け、端的に二三の實例をあげて所信を述べることにする。それは知名の大家が或會合の席上において述べた意見を又聞しての話であるが、國讀卷六に『くりから谷』といふ平家物語を種本にした一文がある。

木曾義仲が都へせめ上ると聞いて平家はあわてて討手をさしむけました。大將は平維盛で、十萬騎を引きつれて、越中の國の礪波山にちんを取りました。義仲は五萬騎を引きつれて、これもおなじく礪波山のふもとにちんを取りました。

兩方からおしよせて、ちんの間がわづか三町ばかりになりました。其の夜のことです、義仲はひそかにみ方の者を敵の後へまはらせて、兩方から一度にとつとときのこと系をあげさせました。

不意を討たれた平家方は、上を下への大きき弓、矢を取った者は矢を取らず、矢を取った者は弓を取らず、人の馬には自分が乗り、自分の馬には人が乗り、後向に乗る者もあれば、一匹の馬に二人乗る者もあります。暗さは暗し、道はなし、平家方はにげ場がなくて、後のくりから谷へ、なだれをうつて落ちました。

親が落ちれば其の子も落ち、弟が落ちれば兄も落ち、馬の上には人、人の上には馬、かさなりかさなつて、ずぶん深いくりから谷が、平家の人馬で埋まりました。

大將維盛は命からんく加賀の國へにげました。

可なり歪みに富んだ面白い表現で、種本が種本だけに子供に喜ばれる教材である。某大家はこの教材を指摘して、自分は最近各地で不思議にもこの教材の取扱に幾回となく直面した。しかし一つとして自分を満足させるものはなかつた。この教材はたゞ漫然と読ませただけでは満足されない。これはどうしても深くその内面に食ひ入つて、『滅び行く民族の姿』を読ませなければならぬ。そこまで行かなければ、この教材の教材価値を發揮したものとはいへない。自分は各地で

この國語の精神とするところを説き聞かせて、教材の主眼點を取外さないやうに注意した——と力強い語調で列席の人々の同感を求めたさうだ。私はそれが一座の承認を得たかどうかを知らないが、いやしくも國語教育を語る、さうした権威者の會合に、そんな獨我的な、超俗的な意見が無條件に承認されようとは思はれない。この大家の錯誤は、文意そのものゝ生長性を認めなかつたところから來たもので、自己の學殖修養を以て他を律せんとする無理を敢てしたものといへよう。文意は生長する。したがつてその人の學殖修養の如何によつて、その深淺厚薄の程度を異にする。子供には子供の意味があり、大人には大人の意味がある。それは同一軌道の上を走る、同心圓的發展で、正しく方向を一にしてゐなければならぬ。ないのはいふまでもないが、その間おのづから程度の相違あるは否定しがたきところであらう。だから或人には『滅び行く民族の姿』と見ることが出来るかも知れないが、それと程度を異にした人には、少し碎けた『負けて逃げる平家のあわてかた』といった形に見えるかも知れない。率直にいふと、私たちにどうしてもあれを『滅び行く民族の姿』と見ることが出来ない。某大家の如き學殖があり

修養を重ねた人にはさう見えるかも知れないが、それはその人にして始めていへること、普通一般の人にはそんな高遠なもの望まれない。いはんや子供においてをやである。難きを望むは強ひるのである。それが如何なる破綻を來すかは想像に難くはない。

私たちはふだん教材を通して現はれて來る子供の心を直視することを忘れてはならない。さうしてそれが私たちの意圖するところと合致するかどうかを敏感に意識することによつて、いふところの教材觀の確立なるものが期し得られる。その間いさゝかでも間隙があつたら、それが實際の仕事の上に破綻を來す大きな禍根をなすものであることを自覺してゐなければならぬ。つまり教材を中間において働きかける心と心の問題なのである。も一つ例をあげていほう。

俵の山 (國讀卷六)

『今年は何んたうにほう年だ。今の分では去年より七八俵よけいに取れさうだ。』

『さうです。新田が大へんよく出來ました。來年もやはりあの稻を作

りませう。』

朝飯の時こんな話が出ました。今日はうちの者がみんなたんぼへ稻こきに行きました。おるす居はおぢいさんと私だけです。

おぢいさんが庭にほしてあるもみをかへしていらつしやると、卵買が來て、卵を七つ買つて行きました。

今どこのうちへ行つて見ても、俵の山が出來てゐます。うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。一番下は四俵、一番上は一俵で一山は十俵づつです。

昨日までに二山出來て、もう三つ目の山が出來かゝつてゐます。今日庭にほしてあるもみをすつて、俵に入れてつんだら、三つ目の山は出來上りませう。

私がたんぼへお湯を持つて行つてくると、おぢいさんが庭で腰をのばして、

『もうお晝かな。』

とおつしやいました。土間でこぼれもみを拾つてゐたにはとりが、俵の山へ上つてときを作りました。

この文は先づ作者——この文の主人公——の父と母との間にかはされた對話

から始まつて、田園の秋の情景と作者——この文の主人公——の或日の生活とを描寫したもので、その對話の態度も三種三様の色彩を具へたある特殊な手法を持つてゐるが、全面には田園情調の最も充實した明朗な氣持のいゝ文である。

一滴の汗は一穂の實に結果して萬斛豐饒を招來する。一鋤の勞を惜み一本の莠を許すとき、現前する秋實の淋しさに誰か反省しないでゐられよう。大自然を對手とする田園の生活には全く嘘偽も詐謀もない。大地に耕し大氣を呼吸し、晨に出で月を踏んで歸る。働くものには幸し怠るものには飢を與へる。自然は頗る公平で、その問いさゝかも不平をもらす餘地もない。茅屋に生れ麥畝に育ち、思ふがまゝに大氣を吸つて濁りない日の光にはぐくまれた身體に、魂に、何の停滯があらう。何の偽りがあらう。眼に映り、耳に響くものゝすべてが、あるがまゝの自然であり、大道なのである。かうした嚴肅そのものゝ生活を凝視してから、この文の冒頭の、

『今年ほんたうにほう年だ。今の分では去年より七八俵よけいに取れさ

うだ。』

『さうです。新田が大へんよく出來ました。來年もやはりあの稻を作りませう。』

朝飯の時こんな話が出ました。今日はずちの者がみんなたんぼへ稻こきに行きました。おるす居はおちいさんと私だけです。

に目を移したとき、我々は果して何ものを直視するであらうか。すべてが堅實そのものゝ生活達者なものは達者なもの、年寄は年寄、子供は子供と、家内こぞつてみんなそれ相當の仕事をして一人として遊んで暮すものがない。これでは不平の起きよう筈がないではないか。働くものゝ幸福すべてが汗の賜物である。

今どこのうちへ行つて見ても、俵の山が出來てゐます。うちでも土間に丸太を置いて、其の上につんであります。一番下は四俵、一番上は一俵で、一山は十俵づゝです。

これを天恵といはずして何といはう。一俵又一俵、土間に積み上げられる俵の山、それは汗の結晶してなつたもの、これが誇りでなくて何であらう。天は働くものにのみ幸する。農村生活の尊さはこゝにある。かくして一語一句のすべてが皆これ感激、禮讚、俵の山はそれを象徴したものといつて然るべきであらう。

私たちはこの教材に對して、いふにいへない或種の感興にそゝられる。冒頭の對話から結尾の時を告げる鶏の聲に至るまで、讀みつゝも思はず目がしらが熱くなるのをさへ覺える。しかしこれは私たちだけのことだからといつてこれをこの時期の子供に期待するのは無理であらう。子供は子供、大人は大人、そこに文意の生長がある。

むろんそれは方向を異にしたものではない。たゞその程度を異にするといふだけで、いはゞ同心圓的に無限に伸展するものと解しなければならぬ。この文でいふならば、我々であつたら、これを農村生活の禮讚と見、俵の山はそれを象徴したものと解すべきであらうが、子供——特にこの學年の子供——としては、これを作者——主人公——の實感と見うち、幼うのものがみんな働いてこしらへ

上げた俵の山、それを見上げたこの子供——作者——の喜びとでも解すべきであらう。かくして俵の山を直觀の焦點におき、『今年は豊年だ、うちにも俵の山が幾つも出来て嬉しいな』といった想の形をとらへることが出来たら、それで満足しなればなるまい。

このことは同一學年幾十名かの子供についてもいへる。級中の子供のすべてが同一程度でないといふことを是認するならば、そこにはあらはれる個人差が、讀みの深さの相違を見せるのは當然過ぎることであらう。この場合、讀みの深さの相違は、作者の意圖への隔りの如何を意味したもので、それは直ちに文意把握の程度如何を物語つたものともいへよう。尤も中には作者の意圖への方向をすら見失つてしまふやうなものもないとはいへまいが、それは別として今日の學校の子供であつたら、讀みに深し淺しはあるとしても、大體同一方向——作者の意圖への——に進み、又進み得べきものと見て差支へないであらう。したがつて教師は、先づ何よりもその標準ともいふべき、學年相當の文意を想定して、それを指導の中心におくことを忘れてはならない。かくして一つの文を中心にして、すべての子供が同

じ方向にむかつて、全我全心力の限り働きかけるところに讀方學習の意義がある。くりかへしていふが、文意は生長すべきものである。それ自身無限に伸張し無限に發展する性質を有してゐる。それは直觀の程度を具象したもので、讀みの深化につれて刻々に進展し向上すべきものである。しかしてそれは同一軌道の上を走る同心圓的の進展で、唯一の方向においてすることを忘れてはならない。

文意の統一性 文意は全體を統一し全體を統率する。それは恰も一國の王者がその國に君臨して、すべての國家組織とあらゆる社會的信仰の中心となつてゐると同様である。これは知解を主とした科學的文においても、情感を主とした藝術的文にても同様で、いやしくも文と名のつくもので文意に統率されてゐないものは絶無といつてもいゝ。

カラス ガ キマス。
スズメ ガ キマス。
ウシ ガ キマス。

ウマ ガ キマス。
ウシ ト ウマ ガ キマス。

などの初步の單文を始めとして、やゝ進んだ

ユフカタ ニ ナリマシタ。
オチヨ サン ノ ウチ デハ、オザシキ ニ アカリ ガ ツイテ
キマス。
ハヤク カヘラナイ ト、オチイサン ヤ オバアサン ガ シンバ
イ ナサイマス。

といった素朴な文などでも、かりそめにも文と名のつく限り、そこに何等かの想の形を見つめ、作者の意圖する或る何ものかを意識しないわけには行かない。

前の單文にしても、單にかうした立言をしたものとしても、そこには話しかけるものと話しかけられるものとの關係を無視するわけには行くまい。すると必然話者——作者——と聽者——讀者——との對立關係が考慮の中におかれ、ガキマス の立言に對して別個の意義が生じて來る。後の文においては、二人の子

供特にこの場合では誘ひかけてゐる子供の心の動き、それが『ユフカタ ニ ナツタ』『オチヨサン ノ ウチ ニ アカリ ガ ツイタ』といふ事實によつて志向され、『ハヤク カヘラナイ ト』といふ條件を生み、『オヂイサン ヤ オバアサン ガ シンバイ ナサイマス』といふ焦慮にまで發展してゐる。かうしてこの教材の中心點である畫中の子供の心に食入つて、この文の文意のあらはれとも見るべき、『ハヤク カヘラナイ ト』の意味を讀取ることが出來なければ、作者の意圖するところへ接近したもといはれまい。

文が複雑になるにつれ、この精神は一層明確になる。例へば、

きの の たうふう (國讀卷三)

むかし をの の たうふう と いふ 人 が ありました。わか
い とき 字 を ならひました が、うまく 書けませんので、
こまつて ゐました。
ある とき、雨 の ふる 日 に、たうふう が には へ 出て、
池 の はた を 通ります と、しだれやなぎ の えだ へ、か

へる が とびつかう と して ゐます。
かへる は やなぎ の つゆ を 虫と でも おもつた の で
せう、とんで は おち、とんで は おち、何べん も 何べん
も とびつかう と します。だんだん 高く とべる やう に
なつて、とうとう やなぎ に とびつきました。たうふう は こ
れを 見て、この かへる の やう に こんき が よければ、
何ごと も できない こと は ない と きとりました。
それから は 一しやうけんめいになつて、毎日 字 を なら
ひました。ずんずん 手 が 上つて、のち には 名高い 書手と
なりました。

嚴密な意味で歴史的教材といへるかどうかは問題であらうが、それは兎に角として、編者は淨瑠璃の『小野道風青柳硯』に素材をもとめ作者の意圖するところにそれを融合して、この一篇をなしたものと見なければなるまい。したがつて、この事實の如何は問題ではない。たゞかうした素材を取入れて、これを文にまで生長させた作者の意圖を忖度して見るとき、文の全面、一語一句の末にまで滲透してゐる文意のあらはれを意識しないではゐられない。

わかいたとき字をならつたが、うまく書けないでこまつてゐたといふことも、あるときやなぎの枝にかへるが飛びついたのを見て、發奮したといふことも、それから一しやうけんめいに勉強して、たうとう名高い書手となつたといふことも、みんなこの文意のあらはれで、道風發奮の動機ともいふべき、作者の意圖に統一され統率されてゐるものと見なければなるまい。特にこの文の山ともいふべき、

かへる は やなぎ の つゆ を 虫と でも おもつた の でせう、
とんで は おち、とんで は おち、何べん も とびつかう と し
ます。だんだん 高く とべる やう に なつて、とうとう やなぎ
に とびつきました。

のあたり、これを文意の反映と見るとき、そこに作者の情熱の白熱化して火を吐きつゝあるかの感があるではないか。かくして道風が發奮したその心情にまで食入つてなるほどなア……と共感するところにこの文の意義があるのであつて、この場合、作者の意圖は文の主人公である道風その人に移入され、作者即道風の境

涯にあるのはいふまでもない。こゝまで行くと事實の正否は問ふところではない。たゞそれを文にまで生長させた作者の心情編者の意圖を汲取ることが出来たらそれで十分であらう。

繁をさけて全文を略するが、國讀卷七の『鎌倉攻』の如きも、編纂趣意書には歴史的教材として太平記を改作したことがこぼつてあるが、これとて正しい意味において歴史的事實であるかどうかは論議の餘地がないとはいへまい。もとく種本が種本だけに、嚴密な史眼からメスを下したら、是認しがたい點も少くないであらう。しかし、それは問ふところではない。我々はたゞかうした事實を取入れて、これを教材化した作者の意圖を忖度し得ればそれでいゝのである。

『極樂寺坂の味方があやふうございます。』

といふ使の後から、

『大將も討死されました。』

といふ使が來たが、總大將の新田義貞はびくともしません。手もとの軍ぜい

二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました。

冒頭のこの一節を讀んだだけでも、作者は既にいはんとする或る何ものかを我に暗示してゐるではないか。むろんそれは極樂寺坂がどんな重要な地點を占めてゐたか、その方面にむかつた大將の討死が、戦局の上にどれだけ大きな影響を及ぼすものかを知らない子供には無理かも知れないが、たゞこれだけの事實を通して見ただけで、——文のはこびの上から——作者が果し何を讀者に呼びかけてゐるかをおぼろげながらも意識しないではゐられまい。さうして、それは『使が來たが』の『が』や、『總大將の新田義貞はびくともしません』の『びくともしません』『手もとの軍ぜい二萬騎を引きつれて、たゞちに極樂寺坂へ向ひました』の『たゞちに』などの句意や語意に重大な意義を見出させないではおかないであらう。かくして『稻村崎の此方に着いて、賊のそなへを見渡しますと、云々』に敵方の防備の嚴重さを想像させてから、この文の山ともいふべき『義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、云々』の一節に入り、義貞決死の心境を物語つてゐる。前節では『鎌

倉へは海陸ともに攻めこむすきがありません』といつて、人力の如何ともすべからざることを暗示した作者は、この節に入つて、『賊のそなへは忽ちくづれて、防ぐにも防がれず、たゞあわてさわいでゐます』と意外な場面の展開を見せてゐる。その間、

義貞は馬から下りてかぶとをぬぎ、はる／＼と海上を拜しました。さて、心の中に義貞、今天皇の御ためにいくさを起して、賊臣北條をほろぼさうとします。海神ねがはくば潮を退けて道を開かせたまへと念じて、黄金作の太刀を取つて、海の中に投入しました。

すると、これまで潮の満ちてゐた稻村崎は、其の夜の月の入る頃に、二十餘町にばかり干上つて砂地にかはり、落ちて行く潮にさそはれて、賊の軍船はことごとく沖へ流れてしまひました。

義貞はこれを見て、『ものども進め。』と、其の遠干がたを眞一文字に鎌倉さして攻めこみました。

といった事實を巻き込んで、義貞の至誠純忠は、その勇猛果敢な行動と相俟つて、遂によくこの天祐神助を得るに至つたことを納得せしめ、その由つて來るところを明かにしてゐる。

かくて末節の

此の時義貞が方々へ火をかけさせますと、濱風が之をあふり立てたからたまりません。鎌倉は一面火の海になつて、賊の大將高時以下北條方は、此の火の中にほろびてしまひました。

といった、奇蹟的の快勝を見たことが、一段と意義を添へて來る。事實を事實としてながめたら、ただそれだけのことであるかも知れないが、その由つて來るところを明かにし、義貞をしてかくあらしめた作者の心情にまで食入つて考へて見ると、そこに文意の炳乎として輝いてゐるのを意識しないではゐられまい。さうしてそれがすべてを統一し、すべてを統率してゐることを見逃すわけには行くまい。「びくともしません」といつた態度も、平然と『賊のそなへを見渡し』た心境も、『海

神ねがはくば潮を退けて道を間かせたまへ』と念じた心持も、『ものども進め』と干がたを眞一文字に鎌倉へ攻めこんだ行動も、『方々へ火をかけさせ』た智略も、みな信するところが、頼むところがあればこそである。かうしてこの文がなり、この形象を見るに至つたとするならば、誰かこれらを文意の放射、文意の片影と見ないでゐられよう。我々はこれらの語句節を手繰つて、その奥に内在せる王者の殿堂をうかゞひ得たとき、これを名づけて文意の把捉とはいふ。

國讀卷八の『鷲』の如きは、文意が文の冒頭に露出してゐる。

大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアアル。
金アミノ中ニ飼ハレテ、ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ、怒ツテキ
ル肩サキノ曲ツタ大キナクチバシ、スルドクテ落着イテキル目トガツテ
カギノ如クニ見エル瓜、コゲ茶色ノ羽、アクマデモガンジヨウナツバサ、尾、
何所ニ一分ノスキモナク、強ミガ全身ニミチミチテキル。マシテ自由ノ
天地ニ居テ、自在ニ空ヲトブ様ハ、實ニ勇マシイモノデアアル。スナハチ一
間餘モアルツバサヲハツテ、數分ノ間羽バタキ一ツセズ、空中ヲノシテ行
ク、サウシテ何カ地上ニエモノヲ發見スルト、スウツト下リテ來テ、急ニツ
バサヲチマメ、風ヲ切ツテマツシグラニエモノノ上ニツカミカ、ル。狐。

狸・兎・犬・豚ナドハ彼ノ求メル物デアアルガ、マレニハ庭先ニ遊ンデキル子ドモヲサラツテ行クコトモアル。
鶯ハ遠ク人里ヲハナレテ深山ニスム。巢ハ至ツテソマツナモノデ、人ノヨリツケナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ上ニ、タテ横ニ小枝ヲ並べ、其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアアル。春ノ初ニ二三ノ卵ヲ産ミ、五週間程アタメテ、ヒナニカヘス。ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアアル。

全文を通讀してその形象を内視するとき、文を形づくる語句節のすべてが、冒頭の『大キサカライツテモ、強サカライツテモ、鶯ハタシカニ鳥類ノ王デアアル』の一語に壓搾されてゐることに氣付くであらう。

金アミノ中ニ
飼ハレテ、ジツ
ト止リ木ニ止
ツテキルノヲ
見テモ

怒ツテキル屑
先ノマガツタ大キナクチバシ
スルドク落着イテキル日
トガツテカギノ如クニ見エル爪
コゲ茶色ノ羽
アクマデモガンジヨウナツバサニ

何所ニ一分ノスキモナ
ク強ミガ全身ニミチミ
チテキル。

マシテ 白山
ノ天地ニ居テ、
(2) 自在ニ空ヲト
ブ様ハ、實ニ勇
マシイモノデア
アル。

鶯ハ遠ク人里
ヲハナレテ深
(3) 山ニスム。

スナハチ
一間餘モアルツバサヲハツテ、
數分ノ間羽バタキ一ツモセズ、
空中ヲノシテ行ク。
サウシテ
何か地上ニエモノヲ發見スルト、
スウツト下リテ來テ、
急ニツバサヲチミメ、
風ヲ切ツテマツシガラニエモノノ上ニツカミカ、ル。
狐・狸・兎・犬・豚ナドハ彼ノ求メル物デアアルガ、
マレニ子ドモヲモサラツテ行ク。
巢ハ至ツテソマツナモノデ、
人ノヨリツカナイ絶壁ノ間ヤ老木ノ上ニ、
タテ横ニ小枝ヲ並べ、
其ノ上ニヤハラカナコケヲ置クダケデアアル。
春ノ初ニ二三ノ卵ヲ産ミ、
五週間程アタメテ、ヒナヲカヘス。
ヒナヲ育テル間ハ最モ氣ガ荒クテ、
家畜ヲサラフノモ多クハ此ノ時デアアル。

すべては冒頭に露出してゐる『鶯ハタシカニ鳥類ノ王デアアル』の展開したもので、(1)(2)(3)はそれを具體化したものに外ならない。かくしてすべてがこの一點

の朝宗し、この一語に統率されて、この一篇を形づくつてゐることを意識したとき、作者の意圖するところも明かとなり、各語の位置も亦自ら明確となるであらう。

『ジツト止リ木ニ止ツテキルノヲ見テモ』の『モ』、『マシテ自由ノ天地ニ居テ』の『マシテ』その他『スナハチ』、『サウシテ』などの文意への契機とも見るべき語句が、

想の展開の上に如何に重大な意義を有してゐるかは、文意の如何を確め、文の體系を明らかにした後でなければ知ることが出来ないであらう。

人或はいふかも知れない。この文は驚に關する理科的知識を附與するものとなるほどそれには違ひない。だがそれは素材についていつたことで、文そのものの本質の上から眺めると、理科的であらうが、地理的であらうが、そんなことは問題ではない。それよりもさうした素材を文に取入れた作者の意圖そのものが問題なのである。むろん、そこに取扱はれてゐるものが理科的のそれであつたら、その文を読むものが理科的知識を得るであらうことは想像にかたくはない。だがそれは當然の結果で、與へようとして與へたものではない。——實際からいふと、知識としてはそれが一番確かだが——したがつてもしもさうした知識を與へること

を目的にしてこの文を取扱ふものがあつたら、——知識は與へられるかも知れないが——文そのものゝ本質を没却するはいふまでもなく、あつたら生き／＼とした文そのものを死灰たらしめるものといふべきであらう。聞くところによると、この文の筆者は、わざ／＼上野の動物園に出かけて、驚と一日中にらみつきして、強みがおのづと全身にみち／＼て來たとき、筆をとつてこの文をなしたといふ。なるほどさうかも知れない。

素材の質は異なつてゐるが、卷十の『文天祥』も亦、文意が文の表面に露出してゐる。

支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地ををかし、かば、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、『羊の虎に向ふが如し、危し。』と。天祥きかずしていはく、『我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。』と。出でて元軍に當る。

然るに元軍の勢いよく盛んにして、宋軍到る處に收れ、皇帝、皇后も遂に

敵手に落ちぬ。こゝにおいて皇兄位をつぐ。文天祥命を奉じ、各地に轉戦して元軍を破る。されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。たま／＼元の大軍至るに及んで

天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。時に宋の勇將張世傑よく戦ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく、「書をしたゝめて張世傑を招け。」と。天祥固くこぼみていはく、「我、國を救ふことあたはず、いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。」と。

張世傑等の奮戦も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、張弘範、文天祥に説きていはく、「宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なからず。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。」と。天祥きかず。或人又なじりていはく、「汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。」と。天祥いはく、「父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、尙治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。」と。遂に獄に投ぜらる。

元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。天祥いはく、「我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくば

我に死をたまへ。」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としていはく、「臣が事終る。」と。うやく／＼しく南、宋の方を拜して死す。

元帝歎じていはく、「文天祥は眞の男子なり。」と。

文天祥は支那隨一の忠臣、我が朝の大楠公のそれにも比すべき人、祖國の難を救はんとして敢然たつて強敵にむかひ、孤軍を率ゐて各地に轉戦し、しば／＼敵軍をなやましたが、大勢非にして遂に捕へられ、宋亡ぶと聞くや、遙かに祖國を拜して從容としてこれに殉じた。その終始一貫、燃ゆるが如き赤誠純忠の念は、懦夫をしてなほよく起たしむるの概がある。作者の想はこゝに燃え、こゝに結晶して遂にこの文をなしたと見るとき、結尾の『文天祥は眞の男子なり』は、元軍が感嘆した言ではあるが、同時に作者の意圖するところを表明したものともしへよう。

かくして文のすべてはこの一語に統率され、語句節のおの／＼は悉くこの一語に朝宗していさゝかの動搖もない。各節に織込まれた熱烈火を吐くが如き天祥の語、

我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。

我國を救ふことあたはず、いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。

父母の病あつければ、醫藥の效なきを知りても、尙治療につとむるは人情の常ならずや、心力を盡してしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。

我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願くば我に死をたまへ。

臣が事終る。

の如き、一たび文意をかへりみると、その何れもが『文天祥は眞の男子なり』の一語の展開とも見られ、その壓縮されたものが、この一語であるとも見られよう。

たゞこゝに注意すべきは、文意は内在的で、心的無形のものであるといふことである。さうして最も具體的な最も個性的な、生命的なものであつて、決して抽象的

な固形的な概念ではない。したがつて前の『鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル』といひ、今又『文天祥は眞の男子なり』といひ、それをそのまゝ文意と見る人があつたら、それこそ大間違である。二つとも文意のそれを象徴したものは、いへるが、それがそのまゝ文意とはいへない。文意は全文を孕み、やがては展開して全文を形づくるべき動勢的な力を有してゐる。内面的な流動性をもつたもので、価値性と創造性を内に含めてゐる。だから決して固形的な概念ではあり得ない。

詳しくいふと、『鷲ハタシカニ鳥類ノ王デアル』は文の中の一立言であつて、それがそのまゝでは固形した概念でしかない。だが全文を壓縮して得た文意の象徴と見るとき、それは既に内面的な最も具體的な、擴充性に富んだものとして把握されなければならない。『文天祥は眞の男子なり』もやはり同様で、これがこのまゝ文意とはいへないが、文のすべてがこの一語に朝宗し、一語によつて統率されてゐることを知るとき、元帝の言は直に作者の意圖を物語るものと見ないわけには行くまい。かゝるが故に文意の把握はたゞ一に直観あるのみで、心をもつて心を見、いはゆる心眼の力にまたなければならぬ。別言すれば、全我全靈をもつて

文のまことに面接することである。文を読むの意も亦これに外ならない。

二

文意の種類別 文意はその象徴面が形態の上にあらはれてゐるか否かによつて、次の二つに分けて考へられる。

- 一、文意の象徴面が形態の上に露出してゐるもの………(顯在的文意)
- 二、文意が全然文の奥底に沈潜して、その片影さへもあらはさなないもの………(潜在的文意)

(一)は作者が意識的に行つたものと、無意識的に然るものによつてその趣を異にするが、何れにせよ、露出した象徴面が讀解の中心となるのはいふまでもない。例へば前にあげた『鷺』や『文天祥』などは、作者が意識的に意味綜合を行つたものの適例であるが、この外に『うちの子ねこ』(卷三)、『千早城』(卷六)、『胃とからだ』(卷八)、『老社長』(卷九)、『銀行』(卷十) など、その例が少くない。

うちの子ねこ (國讀卷三)

うちの子ねこは

かはい子ねこ、

くびのこすずを

ちりちりならし、

すそにからまり、

たもとにすがる。

うちの子ねこは

かはい子ねこ、

くびのこすずを

ちりちりならし、

まりとざれては

えんからおちる。

韻文ではあるが、文意の象徴面は前にも後にも第二句目に露出してゐる。『かはい子ねこ』がそれである。したがつて讀解の中心はこの句にあつて、すべてが『かはいくなア』といつた氣持に統一されてゐる。

くびのこすずを
ちりちりならし、
すそにからまり、
たもとにすがる。

(1)

くびのこすずを
ちりちりならし、
まりとざれては
えんからおちる。

(2)

1)も(2)も子猫のかはい、所作で、どちらも『かはい子ねこ』の具體化された形である。しかして第一句の『うちの子ねこは』は呼びかけの形をなすと共に、文意を孕む大切な契機をなしてゐる。

卷六の『千早城』では、

楠木正成が守つた千早城は、けはしい金剛山上にはあるが、まはりが一里にも足らず、總勢わづか千人ばかり。(味方)之をかこんだ賊は百萬騎といふ大軍で、城の四方二三里の間は、人や馬でふさがつた。(敵方)

と、先づ舞臺面を描き、雲霞の如き大軍を向ふにまはして、わづか千人足らずの小勢をもつて對峙する正成の苦衷を讀ませ、

こんな山城一つ、何程の事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。賊は坂からころげ落ちて、たちまち五六千人も死んだ。

から以下、正成の奇策縦横、神謀機略の限りを叙し最後に『正成は實にえらい人である』と感激的な稱揚の言をもつて結んでゐる。この最後の一句がこの文における文意の象徴面をあらはしたもので、文のすべてはこの一句に統率されてゐる。この場合『えらい』の一語は、普通ありふれた意味の『えらい』ではなくて、以上に叙

し來つた智謀の事實から醸し出された『えらい』でなくてはならない。

その他、卷八の『胃とからだ』では『世の中といふものは、すべて相持のものです。』がそれであり、卷十の『銀行』では、『成程、うまく出來たものですね。』がそれである。これらは何れも直觀の焦點となるべきもので、文意は常にこの部に白光を放つてゐる。

文意はまた文の題目の上にもその片影を見せることがある。卷七の『マリー』のきてん、卷九の『五代の苦心』、卷十の『たしかな保證』、卷十一の『畫師の苦心』などがそれで、これらは何れも題目そのものに作者の意圖が明示されてゐる。この場合、讀者は先づそれを導光とし、目當をそこにおいて研究を進むべきはいふまでもない。例へば『マリーのきてん』の如き、見方によつては喜劇的にも見れば、愛國的精神の鼓吹とも見えるであらう。だが作者は既に題目において『きてん』とことはつてゐる。したがつてこゝでは、この『きてん』といふことが作者の意圖であり、狙ひどころなのである。さうしてこの『きてん』が敵兵を思ふ壺にはめた喜びともなり、機智にあやつられる敵兵の頓馬さを笑ふ心にもなり、さては祖國愛に

燃える純眞な愛國の精神ともならう。その間あわたゞしい心持にもなり、はらはらした氣持にもなり、ほつと安堵の欣びともなる。何れにしても主人公であるマリーの心が『きてん』を通して動いてゐるのは、作者が文の題目に示した通りである。『畫師の苦心』などもやはりさうで、作者は既にその意圖するところが『苦心』にあることを明言してゐる。したがつて讀者もこの苦心の如何に讀解の中心をおきどこにどんな苦心が拂はれてゐるかを見届ければそれでいゝわけである。以上はおもに意識的のそれであつたが、無意識的に行はれる場合も少くない。

例へば

卷二の『ウンドックツイ』では、

マツサイチユウ

卷四の『柿』では、

『孫へ のこして やる の こと。』

卷六の『氷すべり』では、

すべるく、みんなすべる。

卷十の『アレクサンドル大王と醫師フィリップ』では、
一口又一口、平然と薬を飲む王、一行又一行、おそれと興奮に眼かゞやくフィリ
ップ。

卷十一の『遠泳』では、
僕も思はず『萬歳。』と叫んだ。

卷十二の『小さなねぢ』では、

『自分もほんたうに役に立ってゐるのだ。』

その他、卷二『大江山』の

タチ ガ ヒカレバ、目 モ ヒカル。

卷四『曾我兄弟』の

くどう が 東 へ 行けば、兄弟 も 東 へ 行き、西 へ 行けば

西 へ 行き、

卷六『萬じゆの姫』の

『おなつかしや母様。木曾の萬じゆでございませす。』

『何萬じゆ。木曾の萬じゆか。』

卷七『一太郎やあい』の

『一太郎やあい。其の船に乗つてゐるなら、鐵砲を上げる。』

卷八『啞の學校』の

『おとよ、おとうさんが歸つて、うれしいか。』

などがそれで、これらは何れも意識的ではないが、情感のほとばしるところ、自ら文
意の片影とも見るべきものが、閃光的にその象徴面をあらはしてゐる。

(二)の潜在的文意は、文意が全然文の奥底に沈潜して、表現面にその片影すらも
あらはしてゐないものを意味する。この種のもものは、その形態——表現面——を
通して、その奥に潜在してゐる文意を直視するの外はない。例へば卷二の『ミヨ
チャン』の如き、如何にも子供々々しいさつぱりした文ではあるが、想の形は可な
り複雑に出来てゐる。

ミヨチャン ガ イマ オカアサン ニ ダカレテ、オチチ ヲ
ンデ キマス。

ミヨチヤン ハ マダ 一ツ デス。
 ミヨチヤン ハ ワタクシ ノ イモウトデ、ワタクシ ハ ミヨチ
 ヤン ノ ネエサンデス。
 ワタクシ ハ マイ日 ミヨチヤン ノ オモリヲ シテ アゲマ
 ス。ワタクシ ガ アヤシテ アゲル ト、ミヨチヤン ハ カハイ
 イ カホヲ シテ、小サナ テヲ ダシテ、ウマウマ ト イヒ
 マス。

讀みにおいて反省された想の形は、姉さん氣取ではあるが、やはりまだお乳の味は忘れかねてゐるといつた主人公の心の動きの上に直視される。第一節のミヨチヤンがお母さんにだかれてお乳を飲んでゐるといふ裏には、あたしも飲みたいなアといつた氣持が動き、第二節のミヨチヤンはまだ一つで、あたしはミヨチヤンの姉さんだと威張つて見せた裏にも、お乳がほしいと思ひながら、さすがにさうもいへないといふ微妙な心が動いてゐる。第三節の毎日お守りをしてあげるといふことも、乃至はあやしてあげるといふことも、わざと姉さんらしく振舞つてはゐるものゝ、一面お乳に對する執着があり、と想像される。むろん、これは教師の

側から文を本質的にながめていつたことで、幼稚な子供に期待し得ないのはいふまでもない。したがつてこの時期の子供としては、どこまでも純な氣持で讀みひたらせ、『かはいゝなア』といつた程度の文意を掴ませることが出来たらそれで十分であらう。

卷三の『十五や』卷七の『傘松』卷九の『北風號』卷十の『霧』卷十二の『密柑山』などもこの種のものゝ適例であらう。

十五や (國讀卷三)

十五や の 月 が ざしきの まん中 まで さして みます。
 夕はん が すむ と、うち の もの は みんな えんがは へ
 出ました。えんがは には、夕方 から いも や だんご を つ
 くゑ に のせて、お月さま に そなへて あります。今日 私
 が 川 の 土手 から とつて 来た すすき も、花いけ に
 さして そなへて あります。
 空 は 水 の やう に すみきつて、雲 一つ ありません。
 だれ か 川上 の 方 で、さきほど から ふえ を 吹い

みます。
時時 すすしい 風 が 吹いて 来る と、おもひ出した やう
に くつわ虫 が なきます。おばあさんが、
『ふみ子 も こんや は きつと あちら で この 月 を 見
て みます。』
と、ひとりごと の やう に おつしやいました。
ねえさん は 遠い ところ へ およめ に 行つて いらつしや
る の です。

美しい月をながめ、清光に浴しながら嫁入してゐる姉のことを思ふあたり、三五
夜中新月色、二千里外故人心といった感がある。文も相当複雑で文學味も濃厚で
あるが、この文の生命である作者の抒情精神を把握するには可なりの努力を要し
よう。殊におばあさんが『ふみ子 も こんや は きつと あちら で こ
の 月 を 見て みます。』とひとりごとをいふところなど、たゞ漫然と表現
面をたどるだけだつたら、作者の意圖する抒情の精神を掴むことは覺束ない。だ
が一たび内面に徹して、その奥底に動く作者の想を捉へることが出来たら、冒頭の

『十五や の 月 が ざしき の まんち まで さして みます』を始めと
して、『夕はん が すむ と、云々』の月前のまどゐ、『空 は 水 の やう
に すみきつて、云々』の月下の光景、さては笛の音、くつわ虫、さうした情調の中
に醸し出された老婆のひとりごと、それが思想聯關を形づくつて、一寸の間隙もな
いことを意識するであらう。かくして『いゝなア……何ともいへない……』
といった文意を把握することによつて、作者の意圖する抒情精神も亦自ら明確と
なるであらう。

卷七の『傘松』は、傘松を中心にしてその界隈の田園情調を描き出してゐる。

村の西にくぬぎ林がある。それを通りぬけて四五町上ると、道ばたに大
きな松が一本ある。みきが二かゝへもあつて、枝が傘をひろげたやうに
出てゐるので、村の人は之を傘松と呼んでゐる。其の松の下に石できざ
んだ地藏様が立つていらつしやる。晒木綿のづきんをかぶつて、雨ざら
しになつていらつしやるが、何時もお花が上つてゐる。時々は線香の上
つてゐることもある。
傘松の四五間ききに小さな茶屋が一軒ある。茶屋にはおばあさんが一

人ぼつちで菓子やわらちを賣つてゐる。此のおばあさんにむすこが一人あるのださうだが、ずつと前から南アメリカへ行つてゐるといふことだ。
茶屋から二三町行つた所の右手に、まんぢゆう笠をふせたやうな塚がある。塚の前に馬頭觀世香とほつた石が立つてゐて、其の前に時々新しい馬のくつが上つてゐる。これは馬がけがをしないうやうに、馬方が上げるのださうだ。

こゝにも傘松を中心にして、石地藏や一軒茶屋や、さてはまんぢゆう塚、馬頭觀世音など、田園情調に富んだ素材が列擧されてはゐるが、何が作者をかうさせたかといつた内に指示する内容は示されてゐない。だからもしも素材の外面的理解のみで満足されるならば傘松の位置や、その附近の有様が分ればそれでいゝわけである。しかし一步ふみこんで、この文をなした動機や、かゝる素材を取入れて、これを文にまで生長させた作者の意圖を忖度して見るとき、そこには郷土に對するやむにやまれぬ執着心と田園讚美の熱情との渦巻を意識しないではゐられまい。かうして傘松とその界限に一種いはれぬいたし、ひとなつかし、みを感じ子供相當

『田舎はいゝなア』といつた程度の文意を把捉することが出来たら、この文の讀解は先づ完全といつて差支はないであらう。

その他、卷九の『北風號』における軍馬北風に對する愛著、卷十『霧』における霧の情趣、卷十二『密柑山』における密柑山の美しさなど、何れもこの種の文意に屬してゐる。

文意の表明 文意を如何に表明するか、——これも頗る面倒な問題である。もともと内在的で不可視的なものであるから、これを言葉であらはすのは至難のことといはなければならぬ。殊に情感的な——文意そのものが既に情感的なものではあるが——ものにおいては、強ひて取出していへない場合が少くない。例へば、

ハス ノ ハ ニ ツ ユ ガ タ マ ッ テ キ マ ス。
カゼ ガ フ ク ト、 コ ロ コ ロ コ ロ ガ リ マ ス。

の如き、横溢したその詩趣を表明するのは、大人においても容易なことではあるま

い。殊に

ネズミノチエ (國讀卷二)

『コノゴロ ナカマ ノ モノ ガ、 ネコ ニ トラレテ コマル
 ガ、 ナニ カ ヨイ クフウ ハ アルマイ カ。』
 ト、 年トツタ ネズミ ガ ナカマ ノ モノ ニ イヒマシタ。ソ
 ノ トキ一ビキノ 子ネズミ ガ マヘヘ デテ イヒマシタ。
 『ヨイ クフウ ガ アリマス。 大キナ スズ ラ ネコ ノ クビ
 ニ ツケテ オイテ、 ソノ オト ガ キコエタラ、 ニゲル コト
 ニ シテ ハ ドウ デセウ。』
 『ナルホド ヨイ カンガヘ ダ。』
 ト イツテ、 ミンナ カンシンシマシタ。 スルト 年トツタ ネズミ
 ガ、
 『ソレ モ ヨイ ガ、 ダレ ガ ソノ スズ ラ ツケ ニ イクカ。』
 ト イヒマシタ ノデ、 ミンナ ダマツテ シマヒマシタ。

の如き、そのもの自體が寓意となり、諷刺となつてゐるものに至つては、尙更のことである。

私はかつて知人の細君から、

東京の宿屋で、山國のものと、鳥國のものがお
 ちあひました。山國のものが、
 『日 は 山 から 出て、山へ はいる。』
 と いへば、鳥國のものが、
 『いや、海 から 出て、海へ はいる。』
 と いつて あらそひます。そこへ 宿屋の ていしゆ が 来て、
 『へええ、日 は 屋根 から 出て、屋根へ はいる もの で
 は ございません か。』

の文意を聞かれて困つたことがある。聞けばその家のお子さんが、この文の文意を宿題に課せられてゐたさうである。自分でとれなかつたらおかあさんに聞けといふ命令で、細君も困つてゐるといふことであつた。むろん大人であつたら、一を知つて二を知らぬ井蛙者の偏見を笑つたものとすぐに感付くであらうが、相手は幼稚な子供のことである。そんなむづかしいことの分らう筈がない。こゝにも文意の成長性が痛切に感ぜられるではないか。更にこれと並べて出してある、

『お前 は たいそう とんち が ある と 聞いた。此の から
かみ に かいて ある とら を しばつて 見せ よ。』
『しばつて お目 に かけます。どうぞ ここ へ 追出して 下
さいませ。』

の如きは、いはゆる禪家の當意即妙、奇智縦横なところにいふにいへない面白味があるのであるが、子供に果してそれが分かるかどうか、この學年の子供としては、『オヤ』と感じ、『フ、ン』と苦笑する、それが最も自然で、それ以上を望むのは望む方が無理ではあるまいか。

『ネズミ ノ チェ』にしても、この程度の子供では、『子ネズミ は バカ だね』といつたくらるるところが先づ上乘といはなければなるまい。

文意は全我全心をもつて、文のまことに面接することによつて得られる。したがつてこれが表明の方法も亦全我全心をもつてしなればならないわけである。この意味において一語一言のよく盡しがたきはいふまでもないが、他に適切な方法なき限りは不十分とはいへ、言語のそれによるの外はない。例へば

卷 二

キク ノ ハナ

『一つとりたいなア。』

ウシワカマル

『牛若丸は強いなア。』

ユフヤケ

『夕焼はきれいだなア。』

ミヨチャン

『みよちゃんのかはい。』

お正月

『もうすぐお正月、うれしいなア。』

コレカラ

『もうすぐ春だ、うれしいなア。』

ヒカウキ